
連理の咲く庭 side storys

珀志水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連理の咲く庭 side stories

【ZPDF】

Z0951Q

【作者名】

珀志水

【あらすじ】

連理の咲く庭のサイドストーリー。

こちらは思いついたら書く程度なので不定期更新です。

殆どが一話完結。

たまに続きものあり。

リクというかネタ募集中。

喪失（加奈子&英明）（前書き）

2話後の現実世界のお話

喪失（加奈子＆英明）

仕事から帰ってきて、英明がまず不審に思つたのは、家の明かりが点いていないことだつた。

玄関の明かりを点けて、靴を確認すると、妻である加奈子の靴が整然と並べられている。

外には出でていなことがわかり、余計に不審に思えた。寝ているのかと思い、靴を脱いで寝室の戸を開けるも、誰もいない。

リビングへの境戸を開けて、眉をひそめた。

「力ナ？」

ソファーの上で膝を抱いた人影が、びくりと震えた。

真っ暗な部屋では様子を確認することも出来ず、電気を点ける。パッと明るくなつた部屋で、加奈子が目を真つ赤に腫らして、涙で顔をぐぢやぐぢやにしながら泣いていた。

「ひつ、ひでぢゃあん」

泣きはらした顔の加奈子の足元。

乱雑に置かれた学生鞄で、なんとなく英明は事態を悟つた。

「あのバカ娘に何かあつたのか？」

つい最近まで一緒に暮らしていた、加奈子の姪 蓮。

幼いころに両親を亡くし、兄まで行方不明になり、親戚が揉めに揉めて、まだ24だつた叔母である加奈子がほぼ無理矢理に引き取つた少女。

英明自身はあまり好くは思つていなかつたが、加奈子が実の娘のように猫可愛がりしていた少女に、何かあつたのだ。

「け、警察に、お、落し物だつて、れんらくきて…」

「落し物つて、鞄がか？」

「交番の前に置き去りにされてたつて。さ、緊急連絡先が、私の携

帯だったから、私に連絡来て」

「あのバカ娘はどうしたんだ」

加奈子がヒュウッと息を呑んで、瞳いっぱいに涙をためて俯く。

「い、いなくなっちゃった…」

失踪。

その一文字が英明の頭の中で浮かんだ。

同時に、どうしようもない怒りを覚える。

「あんのバカがっ！」

怒りの対象がいなだけに、苛立ちが増幅する。

それを壁を殴ることで何とか押しとどめていると、ベニツヒシャツの裾を引っ張られた。

「い、これ…」

握りしめていたのだろう、汗でふやけ、べしゃべしゃになつた紙を手渡された。

そこには達筆で綺麗な字で、こう書かれていた。

加奈子さんへ

今まで大変お世話になりました。

ここまで育ててくれて本当にありがとうございました。

説明すると長いし、

英明さんあたりが絶対納得しなむわつなので省きますが、兄さんの下に行くことになりました。

そつちに行くと、もう戻つてくることもできないわつです。

なので部屋に置いてある通帳とかいろいろ、好きにしちゃつてください。

私にはもう必要ないので。

兄さんの下と言つても自殺するわけではないからね。

兄さんと一緒に幸せになりに行つてきます。
加奈子さんも英明さんと明奈とお幸せ」。

それでは。

わよひなり

蓮

せようならといつゝ言葉だけが、やけに鮮明に見えた。

「予想、当たつちやつた」

ふふつと、泣きながら加奈子が笑う。

「予想？」

「うん。彬くん…蓮ちゃんのお兄ちゃん、16歳の時にいなくなつたの。蓮ちゃん、もうすぐいなくなつちやうんじやないかつて、近頃ずつと思つてた」

ああ、そう言えば誕生日まで1ヶ月もないなど、英明は壁に掛けられたカレンダーを見た。

今は7月の初頭。

蓮の誕生日は7月の終わりだった。

「手紙見ても、信じられなくてね。部屋も学校も、バイト先にまで探しに行つちやつた」

ガラスのテーブルに置かれた、蓮のものだらう携帯を握りしめて、
加奈子は英明に縋りついた。

「蓮ちゃん、いなくなつちやつたよう」

子供のように声を上げて泣く加奈子を英明はしつかりと抱きしめる。

影に隠れて見えなかつたが、加奈子の隣で眠つてた娘の明奈もその泣き声で起き、つられて泣きだした。

明奈を宥めながら、英明は自分も泣いていることに気付いた。

好ましく思つていなかつたにしても、あの少女がいなくなるとは
考えていなかつた。

加奈子との付き合いが長かつた分、少女を歳の離れた妹のようにな
見ていた。

それが、こうして突然に失われるものとは、思つていなかつたの
だ。

胸の奥で穴が開いたような喪失感を感じながら、英明は一つ決意
した。

もしも戻つてくることがあつたならば、その時は絶対に一度ぶん
殴り、加奈子と一緒にめいっぱい抱きしめてやううと。

喪失（加奈子＆英明）（後書き）

加奈子さんはほわわんとした人。
英明さんは苦労性。

朝の出来事（お披露目後）（前書き）

短いです

朝の出来事（お披露目後）

「レーン。朝だよー」

田覚まし時計なんて便利な物がない、セイシャーリ。
マーノンにその役田を押し付けてみたら、非常にこじつけない
ことになった。

「うぐつ…

人の上に馬乗りにならないでくださいませんか、マーノン。
苦しい。

肺押しつぶされて苦しいよー。

「ああ、ごめんね」

「…わざとだら。絶対わざとだら、テメH
上半身を起こしながら、胸を擦る。
こいつ、いつか私を殺す気なんだ。
絶対そうだ。

「そんなことより、もう一時だからね」

「…はつ…？」

壁に掛けられた時計を見る。

確かに11時だった。

「寝坊した！」

6時に起こせと言ったのに！

寝坊というからには予定がある。

8時に図書館の司書さんが蔵書室を開けてくれると聞いたのだ。
蔵書室は司書さんと一緒になくて入れなくて、いつもお昼から
しかない司書さんが朝から開けてくれると約束してくれたのだ。

「マーノンのバカあ！」

くわう。

せっかく朝から本漬けだと息巻いていたのにーー。
すぐさま侍女を呼んで着替えを持ってきてもらひ、
その間に髪の毛をブラッシングしていくと、ブラシをマーレンで
取られた。

「そんな乱暴にしちゃダメだよ」

「うつさいー！」

起きれなかつたのは自分のもの、マーレンのせいで倒れなくては倒れでき
ない。

無駄に丁寧に髪を梳くではいつもと変わらないのに、今日だけは
もどかしくてたまらなかつた。

結わえてまでもらい、それがすむと走つて隣の部屋に移動する。
侍女から服を受け取り、手早く着替えを済ませると、私は朝食は
いらないと断つてから部屋を出た。

「本当はまだ8時なんだけどねえ

時計の針を戻しながら、マーレンは咽喉を鳴らした。

朝の出来事（お披露目後）（後書き） (at露目後) (後書き)

時間は24時間で。

（本編では変わらぬか）。その時にほりつけの修正入れます

幸せの結晶（蓮&加奈子）（前書き）

過去話。

幸せの結晶（蓮＆加奈子）

覚えているのは白。

真っ白な雪が田に照らされて、田が痛くなるほど輝いていた。その輝きから田を逸らすために、膝を抱え顔をうずめて、寒さにがくがくと震えながら縮こまっていた。

雪で濡れた地面にじんわりと尻が冷やされても、もう立つ力など残っていなかつた。

寒さで鈍つたのは体だけでなく、思考力さえ奪われて。ぎゅっと目を瞑つても、照らされる雪で俄かに白む闇だけで、完全な闇も来ない世界の中。

意識が真っ暗な闇へと沈もうとした瞬間、感じたのは体を包む温かな温度だった。

「蓮ちゃん。おかゆ食べる？」

手に持つたお椀を示しながら聞いてくる加奈子に、蓮は声もなく首を傾いだだけだった。

「お腹、空いてない？」

熱はもうだいぶ下がつたが、蓮の頬はまだ熱に浮かされたように赤らんでいる。

もしかしたらぶり返すかもしないと額に手を寄せると、蓮が小さく口を開いた。

「おにいちゃん、どー…？」

虚ろな瞳が、手が、何かを探すように彷徨つ。

兄はもうどこにもいないんだと、大人たちの前で堂々と言いつ切つ

たその口で、小さな子供は自身のよすがを探していた。

「どこ…どこ…？」と、加奈子の手から逃れるように身をよじり、何もない空を手が彷徨う。

その姿を痛々しく思いながら、加奈子は年齢にしては小さな体を柔らかく抱きしめた。

すると、びくりと体を震わして、蓮の動きが止まる。

強張った体をそれでもずっと抱きしめていると、次第に体から力が抜けていった。

肩に頭を預けてそのまま眠つてしまつた蓮に、加奈子は「ごめんね」と小さく謝つた。

虐待の痕が残る小さな体。

最近のものばかりではなく、古いものも多く残つていると、医師が言つていた。

年に一度は会つていたのに、一度たりともその事実に気付けなかつた自分を加奈子は責めた。

思い返せば不審なことは多々あつたのに、そのどれもを氣のせいだと目を逸らし続けて。

蓮の両親が死に、多々問題が起つた後で母方の親戚筋に引き取られ、蓮はよりひどい虐待を受けていた。

加奈子が蓮を見つけた時、真っ白な雪が降り積もつた家の外で寒さに凍え、死にかけていた。

あと一歩遅かつたらなどと考へると、背筋が凍る思いだ。

「幸せに、なるうね」

まだ6歳の蓮は、もう十一分にその小さな体では背負いきれないほどの不幸を背負つたはずだ。

なら後は幸せになるだけ。

この子供をめいっぱいに幸せにするんだと、加奈子はその小さな体に誓つた。

まだ24だった加奈子が蓮を引き取ると言いだした時、親戚中が反対したが、結局は加奈子に軍配が上がつた。

24にしてすでにきちんとした収入もあり、蓮を引き取ったことろで生活自体に問題はなく、それ以上に蓮が加奈子に懐いていたのが要因だった。

それから数年。

中学生になつたんだから一人部屋をという加奈子の言葉のまま、2DKのアパートから2LDKのマンションへと引っ越した。

蓮は当初、家賃の高さなどから相当迷つたのだが、引っ越しを済ませてしまえば何も言わず、それどころか引っ越してよかつたとまで思うようになつていた。

アパートで暮らしていた時は一緒に就寝がお約束だつたが、部屋が別となればそれもなくなり、それどころか蓮にとつては追い立てやすい状況となつたためだ。

付き合つている男がいるくせに、お泊まり厳禁、8時には帰宅を引き取つた時から忠実に守つていた加奈子に、加奈子の恋人である英明からどれだけ恨みを買つていたことか。

それに気付かないほど蓮は疎くなく、ましてや鈍感でもなかつた。恋人とも順調な加奈子を祝福し、それなりに充実した日々を送つていた昼夜がり。

空気の入れ替えに窓を開けたその下。マンションの入り口で何やら百面相を繰り広げている怪しい男を蓮は目撃してしまつた。

見て見ぬふりをしたい。

そう切実に思った蓮だが、しかし、男が知り合いだということはマンションの住人に知れているために、仕方なく部屋の奥で掃除をしている加奈子へと声をかけた。

「加奈子さん、不審者が通報されないうちにマンションの入り口に

「ゴー！」

「え？ え？」

「はー やー クー！」

背中を押して、サンダルを足に引っ掛けた加奈子を玄関から追い

出す。

しつかり鍵を閉めて、加奈子が不思議そうにそれでも歩き出したのをドアスコープから見送つて、開け放つた窓へと駆け戻る。

未だに傍目不審者な男がいるのを確認し、まだかまだかと待つていると、どうやら履き違えたらしい片方ずつ違うサンダルに、歩きづらそうにひょこひょこと加奈子がやつてきた。

そこから後は『近所でも噂になるくらいの痴話げんかと公開プロポーズだ。

蓮としては寝耳に水だったが、蓮といる時間が減るといつ理由で英明は加奈子から別れを切り出されていたらしく。

痴話げんかの末、だつたら結婚すれば問題ないだろう！？という勢いに任せた言葉が英明の口から出てきた時は、やつとかと蓮は苦笑した。

もうずっと、加奈子が自分の歳を気にして、結婚を切り出してもらえないことを悩んでいたのだ。

ようやく切り出してもらった結婚に、加奈子が泣きながら、でも幸せそうに笑うのを見て、蓮は心が温かくなるのを感じていた。

「幸せに、なるうね」

温かい腕に抱きしめられながら、夢現に聞いた言葉を蓮は忘れてはいなかつた。

どこか張り裂けんばかりの願いが込められた言葉。

「幸せだよ。大切な人が幸せで、幸せだよ」

睦まじく抱きしめあつ恋人たちの姿に、蓮はひつそりと祝福の涙をこぼした。

幸せの結晶（蓮&加奈子）（後書き）

プロポーズ時、加奈子さん30歳。
英明さん32歳。

ダンスの話（元・拍手お礼）（前書き）

拍手お礼だつた、蓮とマーノン（10話で省いたダンスの話）の会話文に肉付けしたものです

ダンスの話（元・拍手お礼）

1、2、3。1、2、3。

聞こえてくるそのリズムはしかし、実際は1-2、…3。1、2、3。と、狂いまくりだ。

「レーン、さつきから何してるの？」

思わずマーノンがこう問い合わせても無理もないその光景に、蓮は平然とこう答えた。

「え、ダンスの練習」

「…………」

今のが?と問うとも赦されないような気がして、マーノンの目に憐れみが浮かぶ。

「つちよ、何その反応!？」

「人間のダンスっていうの何度も見たことはあるけど、レーンのはあれだね…」

「あれ?」

「踊りっていうものですらないよね」

多分、亀がばたついてるほうがよほどマシだとと思う。

とはさすがに口にしない心やさしいマーノンなのだが、言いたいことをなんとなく察してしまった蓮にしてみれば、嫌味にしか聞こえない。

「…つちよバカ!…」

顔を真っ赤にして怒鳴る蓮に、マーノンは内心にやけっぱなしになつた。

だつて可愛い。

涙目になつちゃつて、すつごに可愛い。

ふるふる震えちゃって、ヤバいくらい可愛い。

力いっぱい抱きしめたいけど、でもそんなことしたら本格的に拗ねそうだ。

抱きしめるのは諦めて、もう少し弄る」とした。

「動きなんて普通決まってるモノだよね?」

「だつたらなに?」

「全然動きが定まってないよな、レーン」

「だつて…」

踊れないことを相当気にしていたようで、蓮は本格的に落ち込みだしてしまった。

ダンスの練習始めてもう5日目。

本番は明日だ。

一向に上達しないことに焦つて居るのも知っていたマーノンは、いじめすぎたかなと頭を搔いた。

「じょうがないな…」

俯いて立ちつくす蓮の前にマーノンが立つ。

「うん?」

何をする気だと睨みつけてきた蓮、マーノンは右手を差し出した。

「はー、手」

有無を言わせない言葉に、反射的に手を乗せた蓮の腰に、左手を添える。

「うえっ!~」

「はい右足、前。…どうして踏むほどで足出すのかな

意図的ことしか思えないほどの強さで踏まれ、マーノンが顔を顰める。

体を離して靴を見れば、くつきりと痕が残っていた。

「ごめんなさい!」

真っ青になつて謝る蓮に、もう一度手を差し出す。

「半歩でいいんだよ、半歩で」

「半歩。…「うん、半歩ね」

「もう一回行くよ?」

「うん」

腰に手を添えて問うと、真剣な顔をして蓮が頷いたので、リズムを刻みながらマーノンは足を動かした。

「……リードに逆らおうとするのはなんですか?」

同じ失敗をしないだけマシかとは思うものの、どうにも反対へ反対へ動こうとしているかのように抵抗を感じるマーノンに、蓮はむーっと眉間にしわを寄せた。

「いや、逆らう気はないよ?ないんだけど…」

「体の力は適度に抜けばいいんだよ。レーンてばガチガチ」リードに流されるだけで、それなりに様になるだらうこと溜息をこぼされ、蓮はいじけたように視線を落とした。

「だつて、じつこの体が密着してると思つと、なんか体に力が入っちゃつて」

抱きついたりする時はそうでもないくせに何を言つてるんだろうこの子は、と呆れと驚きに押し黙ったマーノンの沈黙が痛かったのか、蓮は必死に弁解する。

「これでもレッスンの時よりいいんだよ?今日なんて足踏み出そうとして、縋れて転んだからね!」

それだけ信頼されていると喜べばいいのか。

どちらにしろ踊れていない時点でそう変わり映えしないが。

「自慢になつてないよ、レーン」

「わかつてるよ」

「とりあえずステップ覚えようか」

リードに流されてくれないなら、より正確にステップを覚えるべきだろうとマーノンは判断した。

けれど、蓮はそれがお気に召さないらしい。

「……覚えたつもりなんだけどなあ」

「なら一人でまともにステップ踏めるようにならうよ」

「…………ハイ」

きつと、頭の中では正確に覚えているのだろう。

それに体がついていかないどころか、変な方向に動くだけで。

「まあ、僕も見て知つてるだけで実際踊るの初めてだからね

「あれ、そうなの？」

ちゃんと踊れるのに?と見上げてくる蓮に、マーノンは苦笑した。

ちょっと考えればわかるだろ?」

マーノンが“人間が”踊るダンスなど、普通なら見向きもしない

ことが。

「うん。覚えたのだつて、レーンの練習遠慮見てたからだし」

「…み、見るな!」

ああ可愛いなあ。

握っていた手を離して、右手も腰こまわしてへりひとマーノンが笑う。

「どれだけレーンがこけたつて、気にしないから大丈夫だよ

「私が気にする!」

「ただ、体に傷はつけないよ!」

傷なんてつけたらリイにお願いしてこの国滅ぼそつ。

そんなことをマーノンが考へてゐるとは露とも知らない蓮は、肩を殴りつけながら喚いた。

「人の話聞こうぜ、この野郎!？」

「さて、練習の続きようか?」

殴りつけてくる手を取つて、練習を開しようとするマーノンに、

蓮は暴れた。

「もういやだ!離せ!今日はもう一つ文字の練習して寝るんだから!」

「はいはい

「いー やー だー ー ー ! ! !

抵抗も空しく、その後みつちりと練習させられた蓮だった。

マーノンとはしつかり踊れるようになつた翌日の昼間。

練習相手の講師とは依然として踊れず、マーノンとの練習は全く

もつて無駄となつた。

ダンスの話（元・拍手お礼）（後書き）

マーノンの人気が右肩上がり過ぎていじけた（俺が。変態にしようと頑張つたら、単なる蓮馬鹿になつた…。

ゲテモノ（元・拍手お礼）（前書き）

拍手お礼だつた、蓮と「ヴォルド（晩餐中小ネタ）」の会話文に肉付けしたものです

ゲテモノ（元・拍手お礼）

「これは？」

習慣と化した晩餐の中、これまた習慣と化した問いを私は繰り返す。

何故って、そりや見た目有り得ない食べ物が多いからだ。
最初は黙々と食べてたけれど、その有り得なさの度合いが日増しに強くなってる気がする。

「ステーキだ」

「魚？」

乳白色のそれは、フォークでつついてみた感触では魚といつこ
固い。

「肉だ」

「肉！？」

肉なのに白いのか。

いや、でも今日の毎に食べたハンバーグに似たのは、普通にい
具合の茶褐色だった。

「なにかおかしいか？」

「や、肉にしては…白い」

「そういうものだからな

さも当然といったヴォルトニ、おそれおそれ一 口食べてみる。

「あ、肉の食感…」

味は普通。食感も普通。

見た目の白ささえ田をつむれば、なんことはない、普通の牛肉

だ。

「……うまいか？」

「まあまあ。ソースはもう少し濃くてもいいかも」

「そうか」

「この国の料理は基本的にうす味すぎて物足りないことが多い。自分で料理しかやいたいくらいだが、材料が材料なので断念している。」

「ステーブルってどういう動物?」

やつぱり恰幅のいい動物なんだろうか。

丸々太った動物を連想した私に、ヴォルドが首を振った。

「いや、植物だ」

「…………植物?」

「ああ。食人植物でな。野生のものはとるのがなかなか難しい」

「今食人って言つた?」

「え? つてことはなんだ?」

「この肉」。

「…………げえつ」

吐き気を覚えた私は、マナーも忘れて胃から絞り出したくなつた。今すぐに!

「どうした」

「気持ち悪い……」

口を手で覆いながら、ステーブルがのつた皿を押し退かす。

それで合点がいったのか、ヴォルドは付け加えるように説明した。

「それは養殖だ。餌は魚を食べさせているから、なかなか淡白だと思うんだが」

「養殖できるのか。」

「育てる人大変そうだな。」

「養殖……。あ、でもだめ」

「何がだめなんだ」

「植物が人間バリバリ頭から食べる想像しちゃつたのよ、バカ!」

「！」

「それは災難だつたな」

淡々とした言葉に腹立たしさを覚えながらも、ステーデルの盛り合わせの緑色をしたゼリーに似たものに手を伸ばす。

「……こつちは何？」

「クロントンだ」

「野菜……？」

「いや、海藻だな」

「海藻？」

「ああ。…………あ」

海藻ならば大丈夫かと思い、口に入れた瞬間ぞわぞわぞわつと鳥肌が立つた。

「うあつ！まつずい！…」

こればっかりはすぐさま吐き出してしまった。

とてもじやないが飲み込めた味じやない。

「それはそこににあるソースをかけるものだ」

言われてステーデルにだけかけたソースの存在を思い出したが、後の祭りだ。

「先に言えつての！…」

「すまん」

笑い堪えながらじや誠意がねえよ！

そう怒鳴りたいけれど、口の中に残る異様さにそんなことも言つてられない。

「うう…。まだ口の中に後味が…。何この味」

生ごみに臭みが残つたままの肝すり潰して凝縮したような…。こんな味だけど、多分ソースかけたら美味なんだろうな。この間のデザートみたいに。

「海藻といつても、それは内臓だからな

「な…つ！…？」

やつぱり内臓系か！

レバーとか苦手だから余計に食べれないよ、もう。

「そんなにだめか？」

「ゲテモノ多すぎない？朝食昼食そつでもないのに」「素材を知らないから言えることなのかも知れないが、それがなくともソースかけて味が変わるよつたな、この世界特有とも言える料理は一人で食事をする分にはついぞお皿にかかるといない。出てくるのはヴォルドとの晚餐のみだ。

「この晚餐以外は、普通に食べれる物以外は出させなによつにしている」

「それはそれは……」

晚餐にそれらを出す意味は何だと睨みつけられ、疲れたように肩を落とされた。

「ダミアンがこの晚餐で会話のきつかけにしようと」

ダミアン…宰相閣下か！

なるほど、それで。

「色々出してるわけですか…」

「そういうことだな。クロンテンは私もあまり食べない」

「…」

いじめか…！

これは新手のいじめなんでしょうか…？

本気でゲテモノかよ…！

打ちひしがれている私に、気遣うように「ヴォルドが言つた。

「デザートを食べるか？」

「それを食べずに何を食べると…」

こんなゲテモノで食事を終えさせられてたまるか…！

そう睨みつければ、ヴォルドはややたじろいだ。

「いや…」

まあ、これはヴォルドのせい、とはいわけではないだろう。しっかりと同じ料理を食べることですし。

八つ当たりをやめて、やつてきたデザートに舌鼓を打ちながら私は言った。

「ゲテモノはもういいです。今度から普通に食べれる物お願いします」
「わかった。そう伝えよう」
「お願いします」
切実な願いに、ヴォルドは深く頷いた。

ゲテモノ（元・拍手お礼）（後書き）

こうしてゲテモノは晚餐から排除されました、という話。

陛下の女嫌い（元・拍手お礼会話文）（前書き）

拍手お礼だった、アナクとダニアマンヒコック（ヴォルドの女嫌いに関する話）の会話文です

陛下の女嫌い（元・拍手お礼会話文）

「父様。陛下は本当に女性がお嫌いなのですか？」
「嫌いどころのお話ではありませんよ」
「だな。あれは一種の病気だと思つぞ」
「公式の国外の客人ならば、節度ある対応をしてくれるのですけど
ね」
「自國の女と非公式の客人は、視界に入つただけで機嫌悪くなるし
な」
「そんなんですか？」
「視界に入るつてくらいなら機嫌が悪くなるだけでいいけどよ、触
つたとなると…」
「剣の柄で打ち払つて、その場に放置ですからね」
「夜這に来た姫はどうなつたつけ？」
「斬首にならなかつたのが奇跡でしたね。実家に謹慎ではなかつた
ですか？」
「国外追放もなかつたか？」
「ありましたね」
「……」
「ははつ、坊主は開いた口がふさがらねえつてよ
「まだまだマシな方だとは思うのですが」
「坊主の世代じゃ知らねえだろ」
「え？え？」
「一番ひどかつたのは、陛下の唇を奪つたベリランシェの姫でした
ね」
「問答無用で斬つたからな。死なかつたのが奇跡だろ？」

「手加減なされていたようですよ？」

「殺すつもりだったら死んでるつて。でも相当危なかつたつて聞いたぜ？」

「我が国の医術は大陸一ですからね」

「傷跡残つて、あの姫嫁の貰い手あつたのかね？」

「2年前に嫁がれたらと聞きましたよ？顔だけはよろしかったですか

ら」

「くくつ…、あはははつ」

「わ、笑い事なんでしょうか…」

「エリック。もう少し神経を図太く持つていなければ、陛下の侍従

はやつてられませんよ」

「は、はい！」

「ぶくくくつ」

殺していないだけマシだと思え。

は、「この会話の内容を後に聞いたヴォルド談

陛下の女嫌い（元・拍手お礼会話文）（後書き）

こつか他一作のように肉付けしたいけど、今少しのままで…。

酒盛り後（前書き）

時系列無視つてます
パロとしてお楽しみください

「マーノー！」

これでもかとこうほど胸を反って堂々と呼んだ蓮に、いつも通り応えてやつてきたマーノンは、田の前の光景にうん？と首を傾げた。蓮の足元には屍累々となつた男どもがいて、そこから少し離れたところで皇帝であるヴォルドが苦笑交じりに田礼してくる。充満する酒の匂いに、なるほど、酒盛りをしていたのかと、にへと笑つて抱きついてくる蓮を抱きしめながらマーノンは納得した。

目礼のみで、そのまま酒を飲み続いているヴォルドを見ると、かなりの量を飲んでいるようだ。

「レーン、お酒飲んだの？」

「うん！ あまくておいしーの！」

につこにつこと笑う蓮の可憐さに、マーノンもへらりと笑う。酔つてるせいか、舌足らずで幼い印象を受けた。

機嫌のいい蓮を抱き上げて、マーノンはヴォルドの前に座る。

「これつてどういう状況？」

「…レーンが酒を飲みたいと云つだして、カミツロがそれに便乗をマーノンに新しい杯を用意して、それに酒を注ぎながらヴォルドが説明する。

顔色は常時と変わらないのに、随分と酔つているようだ。

「それでこの惨状か…。レーンが可愛いからいいや」

何が楽しいのか、きやつときやつとほじやぐ蓮を腕の中に抱きしめながら、ヴォルドから受け取った酒にマーノンも口をつけた。

「…」

一口飲んでから、マーノンは酒瓶を手にとった。

「やつぱり」

この世界で一番アルコール度数が高い酒であるティー酒だ。神々の間では酒といえばこれだが、人間たちにとってこの酒は並大抵の酒豪では太刀打ちできないと言われる酒だ。

その酒瓶が、ヴォルドの傍にころびると転がっている。もちろん、それらすべて空き瓶だ。

「さすが皇帝……つていうところかな」

「んー！マーノンちゅー！」

ちゅーと言いながら、蓮はマーノンの頭をかかえるように抱きしめていた。

「レーン、何がしたいの」

「ちゅー！マーノンとヴォルド！」

これは一人とキスをしたいという意味か。それとも二人でキスをしようという意味か。

わからないが、とりあえずまた腕の中に閉じ込めて、マーノンは蓮の頬に口付けた。

「はい、ちゅー。レーン、皇帝には自分からしてあげな

「うん！」

ほっぺにキスがそんなに嬉しかったのか、蓮はいい子の返事で勢い良く頷いて、こちらに気にした様子もなく酒を飲み続けていた、ヴォルドへと抱きついた。

あまりの勢いに縛れるよつて二人は倒れこんだ。

「ヴォルドー！」

「……ん、レーンか」

「ちゅーしょ、ちゅー！」

いいながら、すでに顔中にキスを落としている蓮に、ヴォルドは心地よさそうに田を細めながら、お返しにと唇に啄ばむようなキスを落とす。

二人のじゃれあいを見ながら、もしかして蓮はキス魔なのだろう

かと、マーノンは心配になつた。

貞操觀念自體が希薄な蓮だ。

もし外で酒を飲んで、その都度誰かれ構わずキスなんでしたら襲つてくれといつてるようなものだらう。

今襲われるのは相手がヴォルドだからにすぎない。

「ねえ、レーンは僕が来る前もこんな感じだったの？」

「……」

ちゅーー！とまだ言つてゐる蓮をそのままに、ヴォルドは少し考え込んだ。

それから緩慢な動作で顔をあげる。

「いや、反撃できないことをいいことに、アナクたちに理不尽な命令をして殴ついていたくらいだ」

「…そう」

キス魔より性質が悪そつだ。

となると、今のこの状態は相手が僕と皇帝だからか？とマーノンは首を傾げたくなつた。

「マーノン、ちゅーー！」

「ちゅーはもういいから寝ようね、レーン」

無理矢理横にさせて、膝に頭を乗せる。

ちょっと唇を尖らせたものの、すでに眠かつたのか、蓮はすぐに大人しくなつて目を瞑つた。

寝息が聞こえてきたのを聞きながら、ヴォルドへと視線を向ければ、こちらもどこかつづらつづらとしている。

「皇帝、寝るならレーンをベッドに運んで」

声をかけたことで眠りの淵から顔をあげたヴォルドの腕に、蓮を押し付ける。

大事そうに蓮を抱えながら、ヴォルドはゆっくつと頭を傾いで頷いた。

酒盛り後（後書き）

貰つた酒ネタ…。

多分期待されてたのとは違うと思つ。

蓮は酒飲むと幼くなります。

そして常以上の傍若無人になり、特定の人間にキス魔に…。

お姉さま（短文）（前書き）

前倒しでじつしても書きたい衝動にかられた。

よつて時系列としては本編より少し未来。
まだ出てないキャラ有り。

ネタばれ

上記三つが大丈夫な人のみ、お読みください。

お姉さま（短文）

パタパタと走つて来る愛らしい少女に、アナクは大きく息を吐いた。

この国に来てすでに1週間近いが、なぜこつも懐かれたのかがわからない。

女装か。女装のせいなのだろうか。と、未だにさせられている女装姿に、またもため息が出る。

隣で優雅に紅茶を飲んでいるフイーリーシャ神の眷属である蓮は、一貫して我関せずといった態度を崩さず、アナクは一人、やつて来るだろう衝撃に軽く身構えた。

「お姉さま！」

腰のあたりにタックルをかまされ、衝撃を殺しながら受け止める

と、緋色の髪を乱しながら少女が笑う。

手に持っていた籠から焼き立ての菓子を取り出して、アナクへと差し出しながら少女は自慢げに言つた。

「お姉さま！ 今日はメルテ（クッキー菓子）を焼いたんです！ 食べてみてくださいな！」

悲しいかな、アナクには一切伝わらなかつたが。

北の大陸、ロストパーズ大陸の南端に在るモーレ王国。

幸いにも島国であるためか、内陸で起こっている戦禍に巻き込まれず長閑な平和を保つていてこの国で、蓮とアナクは表向き王女の客として滞在している。

王女とは、目の前にいる緋色の髪の少女だ。

王女というには大らか過ぎてどこか町娘のような少女は、手に持つた菓子を掲げて、期待を込めた瞳でアナクを見ていた。

「…レーン様」

大陸が違えば言葉は全く違う。
喋る言葉も書く言葉も、この大陸に関しては全く知らないアナクは、困ったように蓮を見た。

その視線を受けて、蓮は面倒くさそうに動いた。

実際面倒なのだろう。

ガツと菓子の入ったバスケットに手を突っ込んで驚掴みになると、アナクの口に押し込んだ。

「んぐつ…！」

「お姉さまー？」

咽喉に詰まらせたアナクを眺めつつ、蓮はまた紅茶を飲みだす。声も出せず、マーノンの迎えも来ない状況で、苛立ちが募つている蓮にとって、アナクへの態度は完全なるハッ当たりだ。

少女が、アナクが男だと知りながら文物の服を着せるのも、アナクに女装趣味があるので、蓮が誤解させたからだ。

そのおかげで、視覚的苛立ちは随分半減できた氣がすると、内心ほくそ笑んでいる。

「お姉さま！死なないで…ああ、私が作ったメルテに毒が仕込まれていたなんて！！」

涙目でわたわたとしている少女に、アナクが咳きを堪えながらすまなそうに笑っている。

言葉が通じないからこそ微笑ましい光景に、蓮はぼんやりと紅茶を口に含んだ。

お姉さま（短文）（後書き）

ぶつかりかけお姉さま！…がやりたかっただけなんです。
「めんなさい。」

星を歌う（蓮&ワオルド）（前書き）

時系列でいえば1~3~14話の間のお話

星を歌う（蓮&ウォルド）

見上げる夜空に溢れんばかりの星が瞬く。

青い青い星の光は、月明かりと見まがつぽどの明るさがあった。
その明るさに誘われるよう、口を開く。

小さく開かれた唇から漏れ出したのは、柔らかい旋律だった。

輝く夜空の 星の光よ

瞬くあまたの 遠い世界よ

更けゆく秋の夜 澄み渡る空

臨めば不思議な 星の世界よ（「星の世界」川路柳虹／詩）

「歌、か？」

視線だけ声の主に見ると、本から顔をあげてじっとこちらを見て
いた。

ベッドの端に腰掛けているその人物にじり寄りつて、隣にまで
移動する。

「うん」

手にしていた本を取り上げながら頷くと、仕方ないなど小さな子
供を見るように頭を撫でられた。

その視線に、ふと思いつて聞いてみる。

「ね、この国の子守唄とかってあるの？」

「子守唄…。そうだな、有名なのがあるが

「どんなの？」

歌つてと催促すると、困ったように笑われた。

「他の誰かに歌つてもらつてくれないか。私は…」

「なんで」

他の誰かと言つても、そう易々と頼める相手が思い当たらない。それに今聞きたいんだと催促を繰り返すと、頭まで下げられて断られた。

「なんで」

もう一度理由を問うと、言いつらうにこう言われた。
「人前で歌うのはやめた方がいいと、以前言われてな」

「…」

音痴か！

顔がよくても完璧じやないんだなあと、改めて認識した。認識した瞬間、ぶふっと吹いてしまい、バツの悪そうな顔で視線を逸らされる。

それがさらに笑いを誘い、腹を抱えて笑ってしまった。

「くくっ…、うん、ならいいや」

頬んでごめんねと肩を叩いて、なんとか笑いを引っ込める。

「……他にも何か歌はないのか？」

「んー、そうだなあ」

他の歌、と言われ改めて考えると、流行りの歌しか思い浮かばない。

クラシック系の曲しか聞かないこの国で、popを歌う気にならず、さて何にしようかと考へると、昔よく聞いた童謡が頭をかすめた。

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどこ の 細道じや

天神さまの 細道じや

ちつと通して くだしゃんせ

「用の無いもの 通しゃせぬ
この子の七つの お祝いに
おふだをおさめに まいります
いきはよいよい 帰りはこわい
こわいながらも

通りやんせ 通りやんせ（「とおつやんせ」童歌）

「……肌寒くなるのは氣のせいか？」

血りを抱きしめるように一の腕を擦られ、雰囲気だけで恐さが伝わるものなんだなと頷きながら同意する。

実際この歌、人身御供の歌だしね。

子殺しの歌にゾッとしたしないのは当然だらう。

「こわい歌いつぱいあるよ？あ、人身売買の歌、歌つてあげようか

？」

「いや、いい」

「つまんないの……」

きつぱっと断られて、口をすさまめて窓の向こうに見える空を見上げる。

キラキラと瞬く空を視界に入れたまま、また小さく歌を口ずさんだ。

せりあらひかる お空の星よ

瞬きしては、みんな見てる

せりあらひかる お空の星よ（「せりあらひかる星」武鹿悦子／詩

フランス民謡）

一番の歌詞はなんだつたかなと思いながら、本を読みながらメロ

ディーだけ口ずさめば、また優しく頭を撫でられた。

軽く笑みをもらせば、頭を撫でていた手が頬をくすぐるように撫んで離れていく。

その手を追うように視線をあげれば、懐かしむような視線と合わせり、二人して小さく微笑みあつた。

星を歌う（蓮&ヴォルド）（後書き）

この一人の無自覚なイチャつきは、契約とは関係ないんだぜつていう話

契約して顕著になつただけだつたり

皇帝はヘタレに加え、音痴設定が追加されたもよつ

バレンタイン小ネタ（蓮＆マーノン）（前書き）

時系列無視つてゐる挙句に軽く本編に出でないネタばれ有り
(2/14現在、本編は7月の終わりか8月初頭)

バレンタイン小ネタ（蓮＆マーノン）

先日ふと、今日が何の日かを思に出し、いやにそと用意した品をマーノンの前に引っ張りだした。
包装も何もなく、むき出しの本とも言えない本を押し付ける。「なんで私が？とも思うんだけど、いつもお世話をなつてゐるから」れあげる

バレンタインのプレゼントだ。

チョコレートという選択肢も考えたが、マーノンに食べ物という発想自体が私の中になかったので自然と却下された。

「唐突だね。…スプラッタ写真集？」

仏頂面の私に嬉しそうに本を受け取り、中を見てマーノンの瞳に獰猛な色が灯る。

「正しくは画集。結構リアルでしょ？」

宫廷画家の人に頼んで描いてもらつたのだ。

完成品を取りに行つた時、酷く顔色が悪かつたが、あの人大丈夫だつたろうか。

そんなことを思ひ出しつづけると、マーノンがページをめぐりながら嫌な発言をした。

「うん。なんだか誰か殺したくてうずうずしてくるね」

「…おおう。プレゼントの選択間違えた！？」

マーノンといえばこれがハグしか思い出せなかつたからこれにしだけど…。

そうか、よくよく考えなくともこれはヤバイ方向に刺激しちゃつたか。

なんてことしてんだ、私！

「レーン、」この間見つけたケータイとやりで『真集つべれつ』

「嫌だ」

何を言つ出すんだと即答すれば、拗ねる」ともなくいつもの笑みに戻る。

「ケチだねえ」

「ケチで結構。誰が無差別殺人の片棒なんぞ担ぐか」

あと一つ用意したプレゼントを抱えながら吐き捨てれば、一画を見ながら今度はこんなことを言い出した。

「んー。じゃあ戦争がある地域でも行く？それならいいでしょ？」

「考えたな…。でも却下」

「なんで？」

「そもそも、ケータイで写真撮った後に何で印刷するんだ」

それ以前に、行きたくないというのが私の本音だけれども。

本音を知つていてか、人の悪そうな笑みをマーノンが浮かべる。

「リイに頼めば作ってくれそうだけど」

うん。

否定できないのがとても悲しい。

「……嫌だ。行きたくない――――――――――」

「結局行きたくないだけなんだね」

逃げようとする私を抱きかかえ、マーノンはそれ以上暴れさせないようにと抱きしめた。

往生際の悪い私はそれでも尚暴れ続けておりますが。

「悪いか！？」

「強制連行してあげようか？」

顔だけ振り向いて叫べば、全くもって笑つていない瞳とかち合つた。

ヒィッと悲鳴をあげそつになつたが、なんとか咽喉の奥に押し込む。

「断固お断りをせいでいただきます！」

「なんでー？」

「私は血腥いのは好きじゃないのー！…」

必要な殺人なら推奨するが、だからと言つて血を見るのは好きなわけじゃない。

むしろ嫌いだ。

大つ嫌いだ。

そう泣き叫べば、マーノンは呆れたように腕を離した。

「最初からそう言えばいいのに」

「うつさい」

少し乱れた服装を整えながら、さり気なく涙目になっていたので涙を拭う。

もうこんな奴放つておいて、あと一つのプレゼントを届けようかと背を向けたら、何やら不穏な言葉を落とされた。

「しようがない、レーンがそこまで拒否するなら、ちょっとあそちらへんの動物でも狩つてこようっと」

「……っちょ、待て！その動物の中に入間入れんな阿呆！」

窓の外、庭を整備している男を見ながらにんまりと笑うマーノンの、あまりに獰猛で危険な肉食獣の表情に、マーノンが私の許可なしに人傷つけられないとか、そんなことはすっぽりと抜け落ちてしまつて、怒涛の勢いでマーノンに抱きついた。

「大丈夫！ちょーと弄るだけだから」

二マニマニと楽しげに笑つて私の頭を撫でながら、マーノンが言う。

その時にはいつものマーノンに戻つていたけれど、そんなことも気が付かずに、私は泣き叫んだ。

「弄るつて何だ！てか全然大丈夫じゃねえよ、この馬鹿！」

誰でもいいからこいつを止めてーと、マーノンが冗談だと呟つまで私は切に願つた。

バレンタイン小ネタ（蓮＆マーク）（後書き）

「うひじハジシテアシテマスの。」とか「マーク気にしてない。

バレンタイン小ネタ2（蓮＆ヴォルド）（前書き）

マーノン編同様、時系列無視ってる挙句に軽く本編に出てないネタ
ばれ有りです

バレンタイン小ネタ2（蓮＆ヴォルド）

突然部屋に訪れた蓮が、ずんずんと歩み寄つてきたかと思えば、机の上に可愛らしく包装された小さな箱が置かれた。

「ヴォルド、これあげる」

えへへと照れたように笑う蓮は愛らしく、ヴォルドも小さく笑みを浮かべて箱を手にとる。

ふわっと香つてきた甘い香りに、中身が何かを知った。

「…これは、レッタか？」

「うん。チョコレートはなかつたから、似たので代用した」「ちょこれーと？」

時折蓮が口にする聞き慣れない言葉の類だろうかと、口の中で重複すれば、今日の日付が記されたカレンダーを指差して蓮が言った。「今日2月14日でしょ？私のいたところじや、田じるの感謝を示す日なのよ」

「ほお」

つい先日も節分だと豆まきなるものをわせられたことを思い出し
たヴォルドは、蓮がイベント好きなのだと認識した。

実際のところは、叔母である加奈子に付き合わされて習慣化してしまつただけなのが、蓮としても嫌いではないのであながら間違いではない。

「まあ、感謝より、愛をささやく日つて感じだつたけど」

だから手作りが多いし、それも手作りだけどねとさりげとと言われ、愛という言葉に思わず貰つたレッタをマジマジと見てしまつた。

「…毒入りか？これは」

「なんでだよ」

間髪いれず不機嫌そうな声を返され、ヴォルドは嫌がらせでは

なさうだと安堵した。

ヴォルドからしてみれば、蓮がヴォルドに愛を抱かやすくといつての

はどうにも想像できない。

こうより、これまでの行動を鑑みれば、今までの報復に毒を盛らせておがいくはないのさ。

「...せこ」

当の本人である蓮がその気はないのだから、蒸し返すことはしないけれども。

言葉を濁したヴォルドに、少々納得いかなそうな顔をした蓮だが、さして尾を引くこともなく、説明を続ける。

…本来は本とか花束とかだが、私の国じゃチヨコレーツとい

「それでレッタ」

チョコレートが如何なるものかは知らないが、多分レツタに近い

「ナニカアリ。」

「かみのくにと細川」

休憩の時に味あわせついもりおつと、礼を言えど、蓮が悪戯つ子の子供のよつて笑つた。

「お返しを3円1-4円で」と返して

「……田辺の感謝だといったのに見返りを求めるのか？」

それは感謝とは違うんじゃないかなと半目になれば、鉄則なのだと返さへん。

「バレンタインに貰つたが、ホワイトデーで返しを。これ絶対！」

「ばれんたいん？」

「2月14日をバレンタインデー、3月14日をホワイトデーって

二〇

蓮のいた世界には、よくわからぬイベントがあるものだと軽く

呆れた。

「そう！だからお返し期待してるねー」

お返し、といわれて、ヴォルドは押し黙った。

蓮にお返しとこ「う」とは、何かプレゼントをとこ「う」とだ。蓮にプレゼント…。

「ヴォルド？」

急に黙ってしまったヴォルドに、蓮が首を傾げる。

「いや、レーンは何がいいだろうかと考えたら、何も思いつかなくてな」

「1ヶ月あるんだし、ゆっくり考えればいいよ」

それもそろかと頷いて、ヴォルドは蓮を見る。

「わかった。…では3月14日は戻つてくるのだな？」

最近ヴィレンシヤーレから、蓮がいなくなることも多い。

お返しをということは、その日元にいるといふことかと問い合わせれば、苦笑いを返された。

「…………あ、考えてなかつた」

ならいいかもしないことかと、考へていたプレゼントの候補から真っ先にナマモノを消した。

「では菓子類はやめて日持ちするものにしておひつ

取つておくことができない訳ではないが、一度出て行つたりいつ帰つてくるかもわからない蓮だ。

食べ物の他になにかいものがあつただろうかと、ヴォルドが考へていると、机に頬杖をつきながら、蓮が嬉しそうに頬を緩ませる。

「…服とか宝石つて言わないあたり、私の好みを理解してるとね」「好みを理解しているといふより、散々他者からの贈り物に対して晩餐で愚痴られたからだ。

元より、邂逅時のフイーリーシャ神とのやり取りで、華美なモノは好まないだろうこともわかっていた。

それ故に、ヴォルドから蓮に贈つたものとこえば、ここでの滞在用にと服をこさえたくらいだ。

「それでもいいが、どうせ部屋に置き去りにされるのだろう?」「

拳句贈り甲斐のないことといつたらないので、候補には上がりようがなかつた。

「そりやあ、荷物になりますから」

「ならば贈つたところで無駄ではないか」

「……華美なものじやなければ、1個くらいつけないでもないけど

一瞬、何を言われたのか理解できずに、蓮の顔に食い入るよつて視線を向ける。

それに顔を真つ赤にして、含わさつた視線を逸らされ、慌てた様に蓮は部屋を出て行つた。

「じゃ!」

走り去つていく蓮の足音を聞きながら、ヴォルドは熱くなつた顔を右手で覆つた。

「……耳飾りでも贈るか」

蓮はどんな顔をして受け取るのだろう。

そんなことを思いながら、贈る耳飾りのデザインを考え始めるヴォルドだった。

バレンタイン小ネタ3（蓮＆フイーリーシャ）（前書き）

時系列軽く無視つてます

バレンタイン小ネタ③（蓮＆フイーリーシャ）

「リィー。これあげる」

持っていたモノを押し付けると、その大きさにフイーリーシャは体を少し逸らして抱きかかえた。

「…これはなんだ？」

「テディベア！くまぬいぐるみだよ」

私の胸に満たない身長のフイーリーシャが、特大テディベアを抱きかかる姿はもの凄く可愛くて、しまりのない顔になるのを止められない。

ああ、可愛い。

「くま…なのか」

怪訝そうに、これが…くま？と眺めるフイーリーシャに、私の知るくまと違つただろうかと不安になつた。

「お気に召さない？」

「いや、愛らしくまなのだな」
ふむ。

花柄の布を使つたせいか？

確かに、花柄のくまは、この世界にでもいなさそうだ。

「そりやあぬいぐるみですからね」

「レーンが作つたのか？」

肌触りは気に入ったのか、嬉しそうに頬ずりする姿に抱きしめたくなつた。

「うん。貰いものの服かつさばいて、作つてみた」

奇妙なほど、ピタリと、フィーリーシャが動きを止める。

恐る恐るといった様子で視線を向けられた。

「……レーン、それはもしゃ先日贈られたドレスの」とか？

「え？ うん。 そうだけど」

何で知ってるんだ？ と頷けば、気落ちしたよつこぬいぐるみに顔を埋めてしまつた。

「……そつか」

ぎゅうっとぬいぐるみを抱きしめ、肩を落とすフイーリーシャに、私は首を傾げるしかない。

「どうたの？」

けれどフイーリーシャは答える氣はないのか、こいつと嬉しそうにぬいぐるみを抱いた。

「いや、何でもない。このくまは余が貰つていいのか？」

「うん。 リイのために作ったから」

そう言つと、フイーリーシャはパツと顔を輝かせた。

「つーそーか！ ありがとうレーン！」

「いえいえ。 喜んでもらえて何よりだよ」

ある意味一番手間だったのはそのトトトイベアだ。

上質の布は扱いが難しい。

縫おうとして布がつれる」ともじばしばつて、悪戦苦闘したのだ。

「レーンー、レーンは何か欲しいものはあるか？」

嬉々として訊ねてくるフイーリーシャに、私は苦笑しながら首を横に振つた。

「んー。 特にはないかな」

私が欲しいのは、兄を田覓めさせることのできる王。

ただそれだけ。

フイーリーシャもすぐこそのこと付いたのか、また肩を落とした。

「…そつか」

何かお礼がしたいのだがなと、消沈とした声に言わる。

「そんなに喜んでくれたなら、来月の14日に、何か頂戴？」

「来月…？」

「そう。来月」

元々これはバレンタインの贈り物だ。

やはりお返しはホワイトデーがいいと頷けば、フイーリーシャは不思議そうに眼を瞬いた。

「何かとは、何だ？」

「そこにはリィが考えて。何でもいいよ」

「うむ…」

難しい顔で考え込むフイーリーシャに、ふとあることに気が至つてすぐさま条件を追加した。

「あ、何でもって言つたけど、小さいものねーお花とか、本とか、そういうの！」

神様なフイーリーシャだ。

何でもなどと軽はずみなことを言つて、どんなものをお返しされてはいただけない。

「余が考えればいいのだな？」

わかつているのかいないのか、そんな返答にもうなぎくになれと同意した。

「うん」

「わかつた！では来月を楽しみにしておれ！」

「うん。楽しみにしてるね」

意気揚々と来月に思いを馳せるフイーリーシャを見ながら、どうかまともなものでありますよつこと、私は願つた。

バレンタイン小ネタ③（蓮&フイーリーシャ）（後書き）

ほのぼの。いいね、ほのぼの。
イメージは保母さんと園児的な。
因みに、ドレスはフイーリーシャがこっそり贈った物。

ホワイトナー小ネター（蓮＆フライーリーシャ）（記書き）

バレンタインの続き

ホワイトマークネタ（蓮&フライーリーシャ）

「レーンー。」

駆けよつてくるフライーリーシャの姿に、何ドーンと走る時は裾に足とられないんだの?と思つた。

歩こうとすると相変わらず裾に足とられですか。転ぶくせに。いや、それより…。

「…何してんの、リイ。」

その手に持つている物はなんだとは聞けず、遠回しに聞いてみれば、無邪氣な答え。

「ほわいとでーだ！」

ホワイトマーク。

ホワイトマーク、うふ。

「……まさかと思うけど、それがお返し?」

「何かおかしいだの?」

「うん。……おかしい。」

不思議そうに手にしている物を見つめるフライーリーシャに、きつぱりと断言した。

おかしいとか以前の問題なのだが。

というより、それを選んだのは嫌がらせか?

「そ、そつか…」

落ち込み始めたフライーリーシャをいたこと思ってしゃすれ、慰める氣はせりせりなく、読んでいた本に視線を落としながら呟つた。

「だってそれ、ウエディングドレスだよね?私の世界の」

「ほわいとは白という意味なのだの?」

「白繫がりかよ…」

まさかの発想に思わず突つ込んでしまった。

何か？

「Jの世界でも田は拳式用のドレスだつてか？」

「あれ、この間黙つて聞いた覚えが。」

「レーンの世界では、田といえばウエーティングドレスなのだと聞いた！」

「なるほど。」

「…誰と結託したのかよくわかるよ。その話したのマーノンしかいねえ」

田って言えば何思い浮かべる？なんて聞いてきたマーノンの魂胆がここにあつたとは…。

田で加奈子さんのウェーティングドレス思い浮かべちゃつたのが運の尽きか。

「まさか違うのか？」

「いや、ある意味そうだけど。着ないよ？」

何がどうして私がスカート類を着用しなければならないんだ。死ねばいいよ。

もうほんと、マジで。

「……ふぐつ。うえつぐ」

「泣くな！」

本来ならば庇護欲をそそられるのだろうその泣き顔も、今は嘘くささしか感じられない。

「せ、せっかく用意したとここの」「

「私にスカート類着させようなんぞ、100万年早いんだよー。」

100万年経とうともスカートなんて絶対着ないけどねー。

兄と加奈子さんに懇願されることがなければ、だけど。

そんな心の声が聞こえたのか、フイーリーシャがじと田で睨みつけてきた。

「何

「レーンはいけずだ」

「だったら何だ」

今さらだと顔を顰めれば、フイーリーシャは得意げな顔で持っていたドレスの下からあるものを取りだした。

「ではこれもいらぬな」

「これ見よがしに見せられたそれに、慌てたのは私の方だ。

「…え？ つちよ、それ！」

この世界に来た時に失くしてしまったと思つていた、兄が別れ際に作ってくれた押し花のしおりだ。

「捨ててしまおう」

「待て！」

何故それをフイーリーシャが持つているのかは知らないが、捨てられてなるものか。

兄がくれたものだといつのこと

「…どうかしたのか？ レーン」

くそつ、フイーリーシャがマーノンに見えるのは気のせいいか？

氣のせいなのか？

「……着ればそれくれる？」

屈服した氣分で悔しいが、これであのしおりが戻つてくるなら安いものだ。

「あげてもよいぞ？」

清々しいまでの笑みをぶん殴りたいけど。

「その笑顔が気に食わないけど…背に腹は代えられない。誰だよりイに知恵つけたの」

…考えるまでもなくマーノンだな。

うん。

「ふふふふふ。レーンのドレス姿…」

気持ち悪い笑いでフイーリーシャは飛び跳ねていた。

もうホント、死んじゃえばいいのに。

ホワイティー小ネター（蓮&フイーリーシャ）（後書き）

リイの逆襲…？

こつそり贈ったドレスをティベアにされたから、びっしつて蓮にドレスを着せようか一ヶ月用意したんだよ、マーレンと一緒に

ホワイトティー小ネタ2（蓮＆マーノン）

「ずいぶん可愛い格好してるね」

裾の長い純白のドレスを引きずりながら歩いている蓮を待ち伏せていたマーノンは、蓮のドレス姿にせっぱり白が似合つないと内心とても満足していた。

ドレスを着ているために機嫌が急降下して、眉間にしわを寄せている蓮も可愛いといつものよつて抱きしめる。

「うつせこ

「うやつたいと言わんばかりに押し退けられても、マーノンは気にした様子もなく懐から箱を取り出す。

「うん。これもあげる」

「…何

頭に何かしらの感触を覚えたのだろう。

怪訝そうに頭にやさしついていた手を握り、出来栄えを見やつて可愛を倍増だとつとつと蓮を見る。

「ティアラ。うん、可愛い可愛い。花嫁さんの出来上がりだね」

何言つてんだこいつとこいつた感情がありありと見て取れる表情も、今は可愛いう要素になるのだからマーノンの思考回路が如何に残念かが窺える。

「皇帝に見せるのもつたといないから、これからデートしようか？」

言つて俗に言つお姫様だつこで抱き上げらたが、だらしない顔でへらへらとしているマーノンに逆ひり氣にもなれず、蓮はされるがままになりながら問い合わせる。

「マーノンと？」

「うん

さあ行こうといいそうなマーノンと反対に、冷淡とも言える無表情で蓮は抑揚もなく言った。

「やだ」

「なんですか」

「途中散歩とかして出すにやがつてゐる」

「図星かよ！」

その格好で涙目止目遣したと迫力が増すかなあ」とて

何の忍力

あ
砦
力
の
か
い
し

加えられ、蓮はコイツは馬鹿だと本気で思つた。

意味わかんねえ！

「うばー！」

一ノ二

いいこと思いついたとでも言いたげな提案も蓮は即座に一蹴した。
これ以上付き合つてられるかと暴れ出した蓮を抑えつけるように抱きしめながら、マーノンが笑う。

「ならなくていい！」

「そんなんじや皇帝に愛想がわかれやうな？」

たかひ?

そもそもあの穴川トにはかせるよな夢想があるのか

「……神子に愛想あひをせぬかよ？」

「……兄さん起きてくれないかな。女装で起きるとなり、いくつでもするの!」

私がお嫁に行つたら泣いて起きてくれるかな！？なんて言い出す始末に、何故だろう、もの凄くいらっしゃったマーノンは、今までの

高揚とした気分が嘘のように機嫌が悪くなつた。

胸糞悪さに吐き氣まで覚え始める。

「ん? どうかした? 怖い顔して」

「……なんでもない。とりあえず化粧しようねー」

「こうなつたら今以上にどびつたり可愛いレーンに仕立てあげて、皇帝のところに送り込もう。

そう決心して、マーノンは蓮を抱き上げたまま蓮の部屋へと飛んだ。

「テメエー離せ馬鹿…………！」

いつもの如く、蓮の叫びは聞こえないものとして虚しく響くだけ

だった。

ホワイトマーク小ネタ2（蓮&マーノン）（後書き）

兄主義の蓮に「マーノン不貞腐れ。

マーノンからのお返しは、ティアラと化粧。

でもどっちかっていうこれ、蓮にっこりより皇帝こだよなあ…。

ホワイトティー小ネタ3（蓮＆ヴォルド）

「…」

やつてきた蓮の姿に、ヴォルドは田を見開いたまま微動だにせず、じっと魅入った。

「…何」

向けられる視線に居心地の悪さを覚えて、蓮は不貞腐れた様にふくれつ面をする。

それにふつと顔を綻ばせながら、ヴォルドは立ちあがって蓮の前に立つた。

「随分と愛らしいな。レーンは白がよく似合っている」

「毎度思うんだけどさ。ヴォルドの女嫌いの基準がわかんない」
艶言でも語りだしそうな甘い表情に、こいつは本当に女嫌いのかと蓮は疑いたくなつた。

しかしヴォルドは、笑みを深めて白いグローブに覆われた蓮の右手を取りキスを落とす。

「そうか？ レーンとそれ以外で、明確ではないか」

「…………」

顔に熱が集中するのを蓮は自覚せざるを得なかつた。

ヴォルドの行動と言動に他意はない。

だからこそ多大な羞恥を覚えてしまい、蓮は何も言えなかつた。

「どうした」

赤面して閉口している蓮の顔を心底不思議そうに、ヴォルドは覗き見る。

その仕草にさえ過敏に反応してしまった。蓮は顔を背けた。

「口閉じよつか、ヴァオルド」

「何故？」

眞面目に問い合わせられて、なんともいえない脱力感が蓮を襲い、馬鹿らしくなった。

「…もういい」

「…そうか？ああ、それでな。先月バレンタインのチョコレートなるものをくれただろ？」「う？」

力が抜けた様に項垂れる蓮を心配そうに見ながらも、ヴァオルドは机の上に置いた箱を手にとった。

「ああ、うん」

「そのお返しなのだが」

手のひらサイズの箱を蓮に手渡す。

味気ない紺色の箱に、装飾の類は一切ない。

今日出来上がったばかりだからだ。

「これ？開けていいの？」

期待したような瞳を向ける蓮に、ヴァオルドは淡く笑みを浮かべ頷く。

「ああ」

そつと大事そうに蓋を開け、中から姿をのぞかせたそれに、蓮の瞳が輝いた。

「…イヤーカフス？」

箱の中の銀色のそれを指で撫で、感触を確かめるように形をなぞつていく。

「受け取ってくれるか？」

「それは…うん」

バレンタインの時に裝飾品でもいいと言つたのは自分だものと額く蓮に、ヴァオルドは安堵したように肩から力を抜いた。

「よかつた」

柔らかく笑うヴァオルドに笑みを浮かべ、蓮は手にした壊れ物でも扱うようにゆっくりと持ちあげる。

窓の外から流れ込んでくる光に透かした。

宝石の類は一切なく、彫刻の模様だけのそれは光に透かした途端、青く光った。

「この模様……」

見たことのある模様に息を呑む。

「契約の紋章だ。気に入らなかつたか？」

「ううん。綺麗……」

この世界の、絆の象徴。
ヴォルドとの絆。

それが契約を交わした時のように青く光るそれは、涙が滲むほどの感動を覚えて、蓮は知らず恍惚とした表情を浮かべていた。
ぎゅっとけれど柔くそれを握りしめて、パツと笑みを浮かべてヴォルドに礼を言つ。

「ありがとう、ヴォルド！」

「いや……」

「ちゃんと身につけるねー！」

「それは、是非とも」

身につけてもらえるなら作らせた甲斐があると頷けば、そんなヴォルドの返答も耳に入らない様子で、蓮はすでに部屋から出ようと駆けだしていた。

「ちょっと待つって、今つけてくるからー！」

蓮がいなくなつたのを見送りながら、口もとを片手で押え、ヴォルドは顔を赤らめた。

「…………あの顔は反則だらつ」

艶のあるけれど純粋な穢れを知らない色の、華のような笑顔。
伸ばしかけた左手を握りしめ、大きく息を吐くヴォルドに、蓮が出て行つたあと入ってきたアナクは、またやつてんのかと生温い視線を向けた。

ホワイトティー小ネタ③（蓮&ヴォルド）（後書き）

神様一人からお膳立てされてるというのに、手も出せないヘタレ皇帝
3月にはこれが当たり前と化している模様
拍手の時はこれで終わりでしたがあと1話あります

ねめか（フイーリーシャ&マーノン）（前書き）

とつあえず、ネタばれ嫌な人は回れ右願います
これは本編に出るまで知りたくなかった…！なんて後悔しそうな方
読んだ後の苦情は受け付けませんのでご注意を
ついでに短いです

おまけ（フイーリーシャ＆マーノン）

「やはりな…」

「もう放つておくことが一番だと思つけど」

ドレスを着ているということもすでに気にしていなさそうな蓮を窓の外から遠目で眺めているのは、フイーリーシャとマーノンだ。

「レーンは結婚とやらをすべきだ」

「もうすぐ子供だって産まれるから？」

「そろそろだと思うのだがなあ」

契約での絆だけでなく、蓮とヴォルドが好きあつてしているのは誰の目から見ても明らかだ。

ただし、好きという定義にのみ当て嵌めて満足している一人が、恋人以上の関係には全くもつてなれていないが。

「無事に生まれてくれればいいけどねえ」

貰ったイヤーカフスをつけて、ヴォルドの下に駆ける蓮の腹は大きく膨らんでいる。

卵ではなく、人の形で産まれてくるのだ。

この世界では史上初の出来事だらう。

「レーンは小さいから心配だ…」

「そう、だね」

卵を産むのとを訳が違う。

人の形をした赤ん坊を産む。

そんなものは見たこともなければ聞いたこともない。

人であろうと神であろうと、この世界には存在しえない知り得ることのない、未知の領域。

あんなにも小さな体を持つ蓮が、子供など産めるものなのか。

ヴォルドたち人間だけでなく、フィーリーシャたち神々ですら予見することは難しい。

「あ、リイー・マーノン！お茶にしよう？」

部屋の中から手を振つて声をかけてくる蓮の笑顔は、常よりも柔らかく愛らしい。

それはきっと、窓から乗り出す蓮を危ないからと支えるヴォルドのせいだろう。

「人間はわかんないや」

互いに微笑み合う甘やかな雰囲気は、人間たちでいう恋人らそのものなのに、当の二人は友人以上恋人未満の関係を崩さない。

「子供が生まれたら楽しみでもあるがな」

「どう変わるかは確かに」

「レーンは、幸せになれるだろ？」「

ヴォルドと茶会の菓子を選んでいる蓮の顔には笑顔が絶えない。

このまま、蓮が幸せになればいい。

「幸せに、するんだよ」

あの笑顔を絶やさせないためにここにいるのだ。

マーノンの真摯な言葉に、フィーリーシャは軽く瞬きをして、小さく口の端を緩めた。

「リイー・マーノン！」

再び呼ばれ、今行くよとマーノンが手を振つた。

おまけ（フライーリーシャ&マークン）（後編）

蓮は卵じゃなくて子供を産みます。

妊娠期間は若干長め…かな?

どうなんだひ、数えてないからわからない（爆

例え話になつた終わり（前書き）

一章17話前後で少しだけ考えたバッヂンド（死にネタ含みます）

過程をすつ飛びして終わりだけ

契約後、妊娠設定なし、皇帝と蓮が恋人関係であったと前提
本編でこの終わり方はありませんのであしからず

例えばこんな終わり

「ねえ、レーン。レーンが欲しい物はなんだつたっけ？」

ほしい、もの。

ほしいとおもつたもの。

そんなの、決まってる。

この世界に来てまで欲したのは。

「兄さんの、幸せ」

どうしてとかなんでとか。

そんな些細なことをすつ飛ばして、まるでそれが絶対みたいに、

私はそれに手を伸ばした。

だつて、兄さんが幸せでないと、私は…。

「ねえ、レーン。目の前に見えるものはなんだらうね？」

笑みを含んだささやきに、私は虚ろに首を振った。

見たくない。

視界に入れてはいけない。

見てはいけない。

堅く瞑つた瞼も、両手で塞がれた耳も、マーノンの前では何の意味を持たない。

「そろそろ現実を見ようか、レーン」

「…つ、私は！」

「レーンが一番好きな人は誰？」

一番、好きな人。

唐突な問い。

意味のある問い。

その答えは、私を壊す。

「すきな、ひとは……」

太陽みたいに綺麗な金髪と空のよろこび澄んだ青い瞳の…。私に触れて、抱きしめて、ただ傍にいることを望んでくれた人。最期まで、私を愛してくれた人。

「ヴォルド」

私を守り、囮つていた世界が、音を立てて砕ける。

鬱蒼とした森の、神殿の中。

十字の石碑が立つ庭で、私は茫然と座り込んでいた。石碑に刻まれた名は。

「兄、さん…」

10年前、召喚されたのは私。

神子だったのは私。

兄さんは…。

「兄さんは、もう死んでた」

死んでた。

けれどこの世界から、兄はすぐに弾かれた。

その遺体すら埋葬することも出来ず、私は泣いて、絶望して、フイーリーシャに理不尽な怒りをぶつけた。

フイーリーシャのおかげで私は助かって、生きてて、それが一層自己嫌悪に拍車をかけて、死にたくなつて。

眠りについたのも、私。

「お帰り、レーン」

後ろから抱き寄せられて、体が強張る。

マーノンの腕の中、その温かさに私は泣いた。

「レーン」

一瞬にして、すり替わった景色は、先ほどと殆ど変わり映えはしなかった。

変わったのは、石碑に刻まれた名前だけ。

「これが、レーンが望んだもの?」

違う。

違うんだと、私は首を横に振るしかできない。

どう否定したところで、これは私が招いた結果だ。頑なまでに兄の幸せを追い求めて、それ以外を顧みなかつた結果。どこからが夢で、どこからが現実だったのか、私は知らない。それでも、ヴォルトと共に過ごした時間は本物で、そして、有りもしない兄の幸せだけを追い求めた私は。

「ヴォルゲルド・ファイーシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツィアーレ」

石碑に刻まれた名を私は宝物を抱きしめるように囁いた。もう戻ることのない、大切な人の真名を。

例えばこんな終わり（後書き）

過程がないと暗さも半減だ。

この話だと蓮は悉く大切な人を失う。

この時点でマーノンも実は瀕死の状態だつたり。

完全なはないにしてもハッピーエンドがいいなあ

ワンシーンパロ（蓮&ウォルド）（前書き）

白鳥 伝のワンシーンパロ

本編のストーリーとは何ら関係ございません
突つ込みどころ満載なので、スルー出来る方のみどうぞ

ワンシーンパロ（蓮＆ヴォルド）

「レーン？」
現れたその存在に、ヴォルドは眩しそうに目を細めた。
その、安堵したかのような表情にて、蓮はもの言えず見入った。
肌着の白いシャツのまま、剣を片手に立つヴォルドは、白うに言ひたり言ひたりと繰り返した。

「レーン」

愛おしさうに、慈しむよひに、呼ばれる名前。
彼は手を伸ばし、けれど途中でその手を止めた。
困つたような苦笑をもらし、ひっこめる。
その一連の動作に、蓮はすでにわけがわからなくなつた。
けれど、自らの目的を果たすべく、腰にさしていった短剣を引き抜く。

「レーンが来るとは、思わなかつた」

「どうして？ マーノンが来るとでも？」

人間同士の事に、マーノンが手を出すわけがない。

それに、今回は手を出さないよう、蓮はきつく言い含めてきた。

「いや…。そうではない。来て、欲しくなかつただけだ」

疲れた様に眼を閉じて、ヴォルドは岩に寄りかかる。

剣を支えにして立つていてるのがやつとだつた。

「…今のヴォルドなら、私でも容易く殺せそうね」

マーノンから貰つた短剣でなくとも、心臓を一突きする」とは容易そうだと、ヴォルドへと歩み寄りながら蓮は思つた。

「レーン？」

不思議そうに瞬くヴォルドに、蓮は隠し持つていた短剣を突き刺

す。

ずつぱりと肉の裂ける感触を短剣越しに感じながら、蓮はきつく目を閉じる。

それから、目を見開いて、ヴォルドを見上げた。
考慮していなかつた身長差から、心臓を狙つた短剣は大きく逸れて脇腹へと突き刺さつている。

「それではだめだ、レーン。ここを突き刺さなければ

「……ヴォルド？」

苦しく喘ぐ息の合間から、心臓を指し示して、ヴォルドが囁く。
「殺して、くれるのだろう？」

がくぜんと、蓮は息を飲んだ。

後ずさつた反動で、短剣が引き抜かれ、鮮血が飛ぶ。

顔を濡らしたその血の温かさに、手をやりながら、体が震える。

「あ……」

出来ない。

そのことを自覚する。

出来ない。殺せない。

血の生ぬるさに身が竦む。

「つそ」

一步、また一步と後退する蓮に、ヴォルドは傷口を抑えながら慌てた。

蓮の背後にあるのは、海へとつながる崖だ。

「レーン、待て……！」

「うそ……なんで？なんで、ここさんのためなのに。ここさんの……」

「レーン！」

上ずつたヴォルドの叫びも届かない。
蓮はそのまま崖の外へと足を踏み出す。

「レーン……ンツツツ……」

落ちた少女は青い海の底へと没された。

ワンシーンパロ（蓮&ヴォルド）（後書き）

勾玉三部作を読み直してたら書きたくなった
前後のストーリーや蓮がどうして皇帝殺せなかつたのかは
好きに補完してください

はぶいた話（前書き）

時系列は一章10話後
11話以降との本編の内容と矛盾する点もあるかもしれません

舞踏会とこのつのを初めて目にして、抱いた感想と言えば「凄い」だった。

何がってそれは勿論、ぐるぐると踊る人たちがだ。
見たこともない変な形の楽器が奏でる、どちらかといえばクラシック系のでも軽やかな音楽に合わせて、階下の人たちがくるくると踊る。

女性のドレスがまるで花が咲くみたいにふんわりと広がるのが、とても綺麗だ。

色とりどりで花畠を見渡している気分になった。

「よくあんな風に踊れるなあ」

踊りはからつきしな私にとって、踊れるというだけで尊敬モノだ。
あ、でもマーノンとなら踊れるようになつたものな。

…マーノン限定つてのがなんか悲しいけど。

しかも微妙にテンポ外してるつて最後の最後までマーノンに言わ
れだし。

「…はあ」

「気分でも悪いのか、眷属殿」

不機嫌にも見える仏頂面な無表情を引つさげたウォルドに問われ、
首を傾けた。

「え? 何が?」

「溜息を吐いただろ? 顔色も悪いようだが」

「あー。いや、高いところ苦手なもんで
足場がしつかりしているとはいえ、恐いものは恐い。

確かにテラスから見下ろす舞踏は綺麗だし、見ていて飽きないけ

ど、これはテレビで見たいもので、生で高じてから見下すのは流石にそろそろ限界だ。

体から血の気が引き始めていて、今にも貧血を起こしそうだ。

「何故それを先に言わない」

咎めるように言われ、強い力で腕をひかれた。

いきなりのことに対する驚いていると、そのまま抱き上げられる。

「へ？ やつ、ちょっと…？」

声をあげた頃にはすでに廊下で、ますます困惑する。

なんで私はヴォルドに抱き上げられてるんだ！？

運ばせるにしたってそこにいる従者さんとかに任せるのが普通じゃないの！？

皇帝直々に運ぶようなもんじゃないでしょー

ていうかどこに行く気だらうか。

あーていうか高い。

下を見た瞬間くらべらしてきた。

さっきより低いけど高いよ、ヴォルド！

アンタ一体何センチあるんだよ！ あーもう一

自棄になつてヴォルドの肩に抱きつくように顔を埋めた。

抱きついた瞬間、ヴォルドの身体が強張つたように感じたが、私はそれどころではない。

真つ暗になつた視界の中で、ようやく安堵の息を吐いた。

視界が遮られてしまえば、感じられるのは歩くたびにゅうりゅうと揺れる振動と、服の上からも感じられる体温のふわふわとした心地よさ。

「ねむ…」

ここ数日あまり寝ていなかつたこともあってかなりの寝不足だった私は、心地良い睡魔に抗えずそのままヴォルドの肩につづぶすよつに眠ってしまった。

Sideヴォルド

真っ青というよりは白い顔をした少女の言葉に、ヴォルドはすぐさま部屋へ返すことを決めた。

これが他国の姫などであれば誰かに呼べば事足りるが、眷属である少女相手ではそれも気がどがめた。

“ フィーリー・シャ神の眷属” という存在を未だにはかりかねていたのだ。

神として扱うには気安すぎ、人として扱うには尊いすぎる。神子であれば相応の対処のしようもあるが、眷属ともなればまた扱いも変わつてくる。

そもそも人型ではなく人であるということがヴォルドの判断を狂わせていた。

「へ？ やつ、ちょっと…？」

一人返してもいいが、この顔色の悪さでは途中で倒れるだろうと瞬時に考えたヴォルドは、少女の小さな体を抱き上げた。

思つていていた以上の軽さに眉を顰めながらも、廊下をつき進む。この重さは10かそこらの子供の重さではないか。

眷属であるからこれほどまでに身軽なのか？

いや、人型の精霊だつてもう少しはあつたはずだ。

この少女は食事はちゃんとしているのかと不思議になつた。夕食は共にしているから食べているのはわかる。

では朝と昼はどうなのだろうか。

後で聞いておくかと考えていると、少女が肩口に顔を埋めてきた。少女のさうりとした黒髪が首筋にかかり、思わずヴォルドの体は強張つた。

気にせずそのまま歩いていると、今度はすつすつとした息が耳元を撻る。

「…寝たのか

この体制で眠れるものなのかと呆れながら、ヴォルドは少女を部屋まで送り届けた。

不思議と感じなかつた嫌悪感に、内心首を捻りつつ、少女の安穏とした幼子のような寝顔に小さく微笑む。

頬にかかる髪を払い、優しく頭を一撫としてから、ヴォルドは広間へと戻つて行つた。

はぶいた話（後書き）

いつから恋愛に発展してもよかつたよね、ヴォルドは。と、（ルーズリーフの下書きを）発掘したとき思った。

蓮&加奈子（元・拍手お礼）（前書き）

蓮12歳時

蓮&加奈子（元・パパ活お礼）

「蓮ちゃん蓮ちゃん、これ着て見ない？」

仕事から帰ってきた加奈子さんの手に握られた紙袋の束に、私は夕食を作っていた手を止めた。

「……また服買つてきたの？」

「うん！」

これ可愛いんだよ！と嬉々として服を取り出し始めたその姿に、重々しく溜息を吐く。

ああ、これで一体いくらの出費なんだらうかと、私の頭はすでに計算を始めていた。

「…………当分はいいくて言つたよね？」

合計で2万か。結構な出費だなあ、おい。

この間旅行するから節約しなきゃねとか言つていたのはどじー誰だつたか。

「でも蓮ちゃんに似合つやうだつたから！」

「いいくて言つたよね？」

稼いでいるのは加奈子さんだが、私に対する無駄遣いは獎励しない。

といふことで強めにとにかくれば、加奈子さんは服を握りしめてしおぼくれ始めた。

「……」

「言つたよね？」

「だつてえ……」

「だつてじゃないでしょ」

涙目で見つけて許しません。

「「」「」めんなさい……」

とか言いながら、まだ買つてくるんだるうな、どうせ。

行動パターンはもう見え見えだから、呆れるしかない。

「もう買つてきちゃったからしょうがないけど

何か買わせないためのいい方法は無いものか。

そんなことを考えている私を前に、加奈子さんはあ試着をと言

わんばかりにずすいと服を押し付けてくる。

「蓮ちゃん！」

「…そうだ。

「冬物が店に並ぶまでにまた服買つてきたら、加奈子さんは夕食なし
ね」

「ええ！？」

「当然でしょ。まつたく、また無駄遣いして」

「無駄遣いじやないよ！」

加奈子さんのお金だからね、どう使おうと勝手だけだ。

でもね、限度って言つものがあるのよ。

「無駄遣いでしょ。何着買つたと思つてるの」

「えーっと10着…くらい？」

「それ入れて17着…去年のも着回せるから買つてくれるなって言つて
たのに…」

クローゼットに入りきらなくなるような服の買い方してどうある
の…

「「」「」めんなさい…」

「そういうわけで、今後冬物並ぶまでに買つてきたから加奈子さん
の夕食作らないから」

加奈子さんの嫌いなコンビニ弁当か、外食で凌いでね。

そう言えば、加奈子さんは本格的に泣きだし、私に抱きついてき
た。

「うう…蓮ちゃんのハンバーグ、エビチリ…チャーハン、オムライ
スう」

そんなに食べたいのか。

私の手料理なんぞ、不味くないだけで美味しいもないと思つんだが。

「食べたかつたら買つてこない」

「…我慢します」

でもまあ、効果観面だから、よしとしといひ。

「よろしい」

まだ泣いている加奈子さんの頭を少しじるぎぬるこ思いで撫でながら笑つた。

蓮&加奈子（元・拍手お礼）（後書き）

蓮の手料理は本人わかつてないけどプロ並。舌肥えてるので味にはつるそい。

文字看得までの道のりはまだまだ長そうですが（元・拍手お礼）（前書き）

一章13、14話の間

文字翻得までの道のりはまだまだ長そうですが（元・拍手お礼）

フィーリング フィーラード

「…？」
「神子と力ある神官の出現時の明確な年代を調べようということになり、ヴォルドが自室にある本を何冊か引っ張り出して見開いた。
「神子が現れたのはミトレー、ファイアブル、セレーヌの時代だな」

る。」？なんだそれと首を傾げる蓮に、ウォルドが丁寧に説明す

は11代だな」

「67代だが？」

実のところ、帝国となってからの話であって、それ以前の王国の頃のも合わせれば100代は軽い。

いた。

純粹な感嘆の呟きに、ヴォルドは小さく苦笑した。

「」の国に限りでは他国と違つて特殊だからな、よく続くところは、続かざるをえないのだ。

神の… フィーリー シャ神の逆鱗にでも触れない限りは。

「んで」

「…」
ウォルドの様子など気にも留めていない蓮は、渡された本を読む
…というよりは解読しようと頭を働かせていた。

が、まだまだ使い慣れない文字に早々に諦めをつけて、ヴォルドに本を手渡す。

指さされたところを読んで、ヴォルドは眉間に寄せた。

「……眷属殿、これは神子じゃない。大神官ホフトルだ」

「……手記なんて嫌いだー！！！」

手近にあつたクッシュョンを殴つて、蓮はそれに顔を埋めた。

この世界にある印刷技術はいわずもがな魔術であり、現代世界にあるような整然とした印刷用文字など存在しない。

書いたものをそのまま印刷するために、書いた人物の癖が文字に表れるのは致し方ない。

「眷属殿はこちらを読むといい。これは私が読もう」

チエ文字にはその癖が出にくい。

だからこそ、ヴォルドはその本を手渡した。

「ありがと。……ヴォルド、これ何て読む？」

最初から読めない文字にぶち当たつて、蓮の顔が悔しげに歪んだ。

「聖女だな」

「聖女か。聖女…聖女き、来りて……」

またしても止まつた指に、ヴォルドが見かねて声をかけた。

「読めないのか？」

「チエ文字ってどうしてこう難しいのー？」

本を投げ飛ばす勢いで机に叩きつけ、蓮は声を荒げた。

「言い回しがどうしてもな。私も意味を間違えることが多い」

神子に関しての伝承の誤りも、記憶に新しい。

「くそつ、滅びろチエ文字！」

ほぼ廃れ始めているから、その叫びが叶うのも近いことだらう。

「アフィン文字なら読めそうか？」

ヴェネ文字とチエ文字がダメなら、残るはアフィン文字だけだ。

「読みやすくて…ある、かな」

「どちらだ」

「チエ文字よりかは断然！」

「そうか。なら………、これはどうだ」

アーフィン文字で書かれた文献はあまりない。

殆どが教会の管理下にあるためだ。

ともなれば、自然と簡単な内容になるが、これくらいならぱいいだろうとヴォルドはその本を選んだ。

「アリイに関する考察？」

「セレーヌの代に現れた神子に関する考察だ」

厚さもさほどなく、絵図付きの本のために文字数も少ない。子供向けともいえる本だが、内容は下手な本より充実している。

「ほほお」

「とりあえず神子に関するその手の本はあと一〇冊ある」

「それって10人分つてこと？」

「ああ。出現時期が知りたいのだろう？」

「うん」

「なら、出現した年号と「くなつた年号だけでも先に書きだしはどうだ？」

「そだね」

「3冊はここにあるが残りの6冊は書庫だな…。私は書庫に本を取りに行つてくる」

机の上に置かれた本を眺めつつ、小さく蓮が笑う。

「取りに行かせる、じゃないんだ？」

「他に持つてきたい本の題名がうろ覚えでな。それに、自分で探し方が早い」

王様や貴族というのは人を使うのが当たり前だという認識がある蓮にとって、ヴォルドのこういつところには好感が持てた。

「そう。いつてらつしゃい」

快く送り出した蓮に対し、ヴォルドはドアの前でふと足を止めた。

「ああ、そうだ」

「…ん？」

「それはアリイじゃなくてアーミィの間違いだ」

指された本のタイトルを改めて見る。

「……………あ、ホントだ」

そこには確かに“アーミィに関する考察”と書かれていた。

文部省審査までの道のりまだまだ長いのです（元・出版おれ）（後書き）

印刷も魔術なれば、字体が統一されることがないだらうな。
なんてことを考えたんです。

疑惑（元・拍手お礼）

「ねえ」

なんとなしに、先田のアナクのことなどが思い浮かんで、田の前で本を読んでいるヴォルドに声をかけた。

「どうかしたか」

「どうかしたっていつかさ」

言いにくいなと思いながら、それでも意を決して聞いてみた。
「ヴォルド私のこと幾つだと思つてゐる?」

「15ではないのか?」

さらりとした返答に、けれど、やはりとにかく希望的観測が混じつていそうな気がした。
となるともう少し下かもしぬないと考えていろと思つても間違いなさそうだ。

「…惜しい。私16だから。うん、でさ。ヴォルドは幾つ?」

「31だ」

思つたより年いつてるなとか、そんなこと今までもこい。
この童顔めが!と怒鳴つてやりたい気分でもあつたが、それもこの際どうでもよかつた。

「ロリ」「ンー」

「ろ…?」

「幼女趣味!」

あれ。たしかこんな意味だつたよな。

勢いで怒鳴つちゃつたけど、ロリータ「ンプレックスの正確な意味つて何だつけ。
わつかんないや。」

などと私が考えていると、ヴォルドからは茫然とした声が漏れた。

「嫁入りは12からが普通ではないのか？」

「…」

「レーン?」

「随分若いんだね」

あ、でも昔の日本もそれくらいだつて。

いやいやいやいや。そんなこともないか。

15、6くらい…だつたよなあ。

どうだつたつけ。

「子を成せるのが10歳から35歳の25年間だからな」「決まってるんだ」

卵生なのも驚きだが、期間限定かよ…。

「男女関係なく子を成せるのはこの期間だ」

「へえ」

「そのせいか、王族の男児は通常10歳の頃から女をあてがわれる」

それはそれは。

そういえば、ヴォルドはいつから女嫌いになつたんだろう。

「…ヴォルドは?」

興味本位丸出しの疑問に、これでもかといったしかめつ面が返された。

「全て部屋から出さだしたら、11になつた時に諦められたな」

「そう」

そこまでくるともう「生まれながらだ」と言われても驚かないわ。

「レーンのところでは?」

「期間はないね。90になつても子供作っちゃう入るし

「…すごいな」

口を開けてぽかんとするヴォルドの顔に、思わず笑つてしまいそうになつた。

まあ驚愕だよね。

90で子供とか。どうやって育てるんだつて感じだ。

「さうちかつて、このと、介護が必要なアソタでしょみたいな。

「節操がないだけでしょ」

だがこれが常識と思われてはたまらないので、ぱっせりと切り捨てた。

「そう、だな」

「うん。…にしてもよかつた」

「何がだ？」

「ヴォルドが変態の部類の人間じゃなくて」

口リコンだつたらどうじよつてちょっと…いや大分心配だつたんだよね。

まあ実際口リコンだつたら、さうわと小さこ女子でも宛がわれてそうちもんな。

「……そんなことを疑っていたのか

「アナクが私のこと14つて言つたけど、なんか希望的観測が混じつてそうちだつたから」

ヴォルドもだけど。

そう言つと、合点がいったでもこうよつて、ヴォルドが言つた。

「ああ。神子とは總じて小さいといつ話だつたからな」

「神子基準…普通の基準なら?」

「普通の基準で見るなら、レーンの外見年齢は10歳ほどだひつ

「…ふうん」

10…10か。

やだな。向こうでは平均的な身長だつたのに。

「レーンはそれ以上成長するのか?」

「…知らない」

出来れば伸びてほしいけど、それこそ希望的観測だ。

「そうか…。出来ればそのままでいてほしいものだが

「なんで?」

「大きくても愛らしきだつとは思うが、小さくほつが愛らしく見えるのは世の常だらう?」

「……あつそ

本気で、ヴォルドのロリコンを疑わなければならなくなつたなど遠い日をする私に、ヴォルドは私の頭を撫でながら首を傾げた。

疑惑（元・拍手お礼）（後書き）

どのみち、ヴォルドは蓮なら何だつていいいんだよ。

蓮の高校生活…？

（前書き）

「れーんつ！」

天気がいいからと体育館近くの外階段でお腹を探つていると、後ろからいきなり抱きつかれて思わずよろめいた。

そのせいで持つていた弁当が地面にぶちまけられる。

「ちょっと聞いてよ！千代の奴、また別れたって！」

「しかももう新しい彼氏作ってるんだよ！？」

「それも年上！超エリート！…」

「付き合つて一日田でやつちやつたつて！」

耳に五月蠅いくらいの声で、友人である香織と未来に捲し立てられて、蓮の眉間に深く皺が刻まれた。

今日は奮発して生姜焼き三枚も入れたのに。かぼちゃの煮物も、調度いい味で煮付けられたのに。マカロニサラダ食べたかったな。

無言で弁当の残骸を見つめる蓮に、隣に座っていた幼馴染がぶはつと堪え切れないように笑いだした。

「これやるからそんな恨めしそうな目で見てんなよ」

差し出されたコンビニ弁当に不味いかりいらないと首を振った。

「え、わーー」「めん、蓮ー！」

「学食いこー？・奢るからさー！」

「いらない

にべもなく断る蓮に、香織と未来は何度も平謝りした。

別段怒っているわけではなく、学食も蓮の舌には合わないだけだ。蓮は一人を宥めすかしながら強制的に空になつた弁当を包み直して、ぶちまけられたおかげとご飯を指差し「片づけてね」とお願ひ

した。

二人は持っていたお皿の入ったコンビニ袋に、残骸を詰め込んでゴミ箱へと走っていく。

「食べなくていいのか？」

幼馴染の龍太郎が今日はバイトだと心配しだす。

蓮にとつては平謝りしてくる一人より、こっちのほうが鬱陶しい。

「平気。1食抜かしたところでどうってことないし」

それよりお前は彼女のところにでも行つて来いよときつく睨めば、喧嘩してるんだと龍太郎は食べていたパンにかぶりついた。

「だからって私のところに来るな。アンタのせいでアンタのかわい－恋人の女子グループに睨まれるの私なんだから」

「蓮ならどうつてことないだろ。それにもうそろそろ別れるからいいんだよ」

「…リュウも千代とどつこいどつこいだよな。今度はどの子狙い？」

中学の半ばぐらいからか。

龍太郎に女が途切れたところを見たことがない。

別れて翌日、もつと早ければ数時間後には新しい彼女が出来ている。

「3組の赤谷。胸がでかくつてさ」

「最つ低」

胸か。

今の子は一回やつたら具合が良かつたからとか言つてたけど、あの子は胸Bくらいだつて話だもんな。

もつとあるように見えたのに、寄せて上げてパットとか、女の子つて大変だよなと蓮は他人事のように思つた。

「林田だつて似たようなもんだろ。あつちは顔とスタイル、それ以上に金重視だけどよ」

確かにと、蓮は深く頷いた。

千代は顔とスタイルがどれだけよくても、金がある人でなければ付き合うことはない。

身体が金かの違いだ。

「どうでもいいけど、毎度毎度、よく後腐れもなく別れられるよね」絶対そのうち刺されそうだ。とも思つのに、一人とも別れた後もどちらかといえば友好的な関係を保つてゐるから不思議だ。

この間普通にメールしてたもんない。

誰とも付き合つたことがない蓮にしてみれば、別れた後も普通にメールや電話できる一人のその神経などが謎すぎる。

「後腐れなさそつな選んでんだよ。割り切つたお付き合いっての？」

「ちゃんとした恋人つくれなくなるよ」

「いーの。そのうちお前と結婚するから」

「一ヶ月もしないうちに破綻だ、それ」

「あ、結婚はしてくれるんだ？」

「しないと加奈子さんがうるさそうだからだ」

一度結婚して数ヶ月もしないうちに離婚すれば、諦めてくれるだろ？

お見合いの斡旋もしないだろ？し、そう何度も結婚しつゝとは言わないはずだ。

「一人暮らし、大変か？」

「別に。一人になった分やること減つたし。バイトも楽しいからそうでもないよ」

「なら、淋しい？」

小さく、蓮の肩が揺れた。

淋しいという感情が、蓮にはわからない。

わからないけれど、一人きりの部屋はとても静かで、無駄に広く感じられるのだ。

「一人が嫌になつたら何時でも呼べよ。飯くらいは食つに行つてやるから」

押し黙つてしまつた蓮の頭を乱暴に撫ぜ回して言つ龍太郎の言葉は、とても優しくほつこりとした温かさがある。

その温かさに田を細めてから、蓮は微かに頷いた。

眞光のつづり（後書き）

暑さにやられていこうな話が思い浮かんだ。
蓮の真操観念云々は、多分この幼馴染と千代ちゃんのせい。

七夕用小話（前書き）

2章interval?~?の間くらい

真っ白な空間だった。

真っ白な空間で真っ白な服を着て、私は真っ白な花束を抱えていた。

マーガレットのような花は、蜂蜜のようなとんでもない香りをただよわせていく。

行くあてもなく、ぼんやりと佇んでいると、黒で塗りつぶされたような空間を見つけた。

入る気にはなれなくて、奥を覗くように黒い空間の一歩手前まで近づく。

黒だけで構成されている空間かと思いきや、ぼんやりと緑と黄色を帯びた光が見えた。

それが人であると気付き、じっと眼を凝らす。

「…ヴォルド？」

紫色の花束を抱えた、よく見知った人間が声に反応してこちらを見る。

口もとに小さく笑みを浮かべて、彼は抱えた花を一輪、黒の中に投げ出した。

ほとんど、足元に何かが落ちる音がして見てみれば、紫色の花が転がっていた。

「菖蒲」

に似ている気がするが、紫の単色かと思っていた花はビックリ。菖蒲も混じっているし、花 자체が両手ほどの大ささで知っているものよりも大きい気がした。

こちらは清廉とした香りがする。

お返しにと、白い花を一輪投げ入れた。

足元に転がった花を、ヴォルドは屈んで、壊れ物を扱うような繊細さで持ちあげる。

そうしてこちらを見ると、本当に嬉しそうに笑うから、直視できなくて花束に顔を埋めた。

ふと、花が大丈夫なら普通に行き来できるのではないかと考えて、顔をあげる。

未だに至極嬉しそうに花を見つめるヴォルドに、照れくさいやら恥ずかしいやらで顔が引き攣るのを自覚した。

満面の笑みを浮かべているわけではなく、それどころか無表情に近いヴォルドの顔に浮かぶ感情を読み取れる自分に対して、なんだか何ともいえない気分になつた。

ちょっと八つ当たりにでもいいから、ヴォルド殴りたい。ということで、一步黒い空間へと足を踏み出した。

「レーン！」

焦つたような声がして、はつとなる。

一步踏み出したはずなのに、黒い空間はいつの間にか消えていた。

「…ヴォルド？」

ただただ白だけが埋め尽くす空間の中、茫然と菖蒲に似た花を見つめる。

「ヴォルド」

会いたいな。

そう口にする前に、目が覚めた。

慣れない天井をぼんやりと眺めながら、帰らなくてはと頭が勝手に考える。

そんな中で、自分がの感情を見つけた。
会いたいな。

毎晩見ていたあの人顔をもう一度見たい。

そんなことを思つて寝がえりをうつ。

右手が何かを掴んでいるような感覚に不思議に思えば、菖蒲に似た鮮やかな紫と冴え冴えとした蒼の花が一輪、握られていた。

七夕用小話（後書き）

一夜限りの逢瀬といつかなんといつか。
会話もしてないけど…。

マーガレットと菖蒲に似た花という設定ですが、花言葉はそのまま
マーガレットと菖蒲で頭の中では起用。
調べられると面白いかもしません。

自然の摂理も通じません（元拍手お礼）

窓から見える景色は一月経とつと全くもつて変わりない。周囲を見るようになつて、そのあまりの変わりのなさに純粹な疑問といつものが一つや二つ浮かぶのは自然の道理だ。

「ここって雨降らないねえ」

思わず呟きとなつて出た言葉に、心底不思議そうな視線をヴォルドから向けられた。

「?何

「すまないが、アメとはなんだ」

「……雨降らないのかあ」

大気の循環とかどうなつてているのだろう。

甚だ疑問ではあるが、魔術が発達している世界だ。

世界の造りからして元いた世界とは根本的に違うのだろう。

この空が、宇宙というソラに繋がつていらないだろうことと同じようだ。

「レーン？」

一人納得していくも、放つておかれたヴォルドは未だわからないままで。

そもそも、私にひとつは当たり前のことすぎて、どう説明しようかと頭を捻つた。

水蒸気とかの説明するひとになるのは面倒だから、思いつき端折るけど。

「あー…。雨つてのは、空から水が降つてくる現象で」

この説明だけで目を見開くヴォルドに、異世界だなあと実感する。

「空から、水が？」

「うん。そういうのないんだ？この世界じゃ」

「ないな。始めて聞く。神や精霊が水を落とす」とは稀にあるが「水を落とす。

現象ではない時点で雨ではなく、よつて自動翻訳ができなかつたらしい。

「へえ…。この世界の仕組みつてよくわかんないわ」

「雨がないといふことは、水がなくても植物つて育つんだろうか。んー、わからん。

「そうか？」

私にはわからなくとも、この世界の人間であるヴォルドからすれば、常識の範疇だ。

わからないことがわからないといった様子で首を捻られる。

「うん。私のいたところじゃ、雨が降らないと結構大事」

「空から水が降らない程度でか？」

「程度。程度…ね。

こんな一言でも、痛感するわ。

この世界の価値観は、私の価値観とは絶対違つ。

「程度ですよー。水枯れて干上がつちやう」

「断水とか住んでたところじゃなつたことないけど、大変なんだろうなあ。

「水が降つてこないと、地上の水もなくなるのか？」

「そりゃあ蒸発するだけだからねえ」

「ジョウハウ？」

「…」この水つて蒸発しないのか！

「聞いたことはないが」

「そうかあ。聞いたこともないかあ。ていうか会話するのも面倒だな！」

「わからない言葉を一々説明するほど、私は優しくはないぞ。

「何やら大変な世界だな。水の確保も一苦労そうだ」

自然の摂理が大変となると、こっちの世界じゃまるで簡単そうに

聞こえる。

…待てよ？

「じょうか」にじゅうや どうやって水の確保してるんだ？

「いわちまどりうなつてるの？」

「水か？川や湖から引いてくるな」

あれ。結構普通。

「枯れたりとかは？」

「したことはないな」

…。

「なんで？」

「何故と言われてもな。それだけ融離魔力が満ちているとこ」^{フィットン}と
れないことに繋がるんだ。

「…意味わかんない」

異世界だなあ、ホント。

常識が遙か彼方で、わたし悲しいよ。

「わからない…か？」

「だつてフィットンがまずわかんないし」

もうどうでもいいやと投げやりになる私に、ヴォルドはふつと微笑を浮かべた。

「なるほどな。…世界が違うところのは面白くな」

「そう？」

面白いとは、到底私には思えない。

どちらかといつと頭が痛くなりそうな感じ。

どつからどこまで私の常識の範囲外なのか、わからない。

それ以前に、全てが常識の範囲外だったりしそうだ。

そんな私の胸中など知る由もないヴォルドは、能天氣に言つ。

「レーンの話を聞いていると楽しい」

「どいが」

「いや、ちとせあまりに違うからな。想像してみると変な世界だ」

「…変、かなあ」

私にとっては当たり前の世界だ。

「あれが変と言われたら、あそこで生きてきた私は立つ瀬がない。
「変だ。子が人の姿のまま母の腹から生まれたり、空から水が降つ
たり。想像を超える」

像を超えるものだ。

「まあ、確かに。私もまさか、人が卵生だとは思わなかつた」

常識が一気に打ち破られた瞬間だった。たもんな

屬徳の力にまつた。物語に語られたように、この三種の御靈が力

「そういう想像を超える話を聞くのは楽しいな。夢物語を聞いてい

少年のよひな邪氣ない言葉に、なんだか恥しくなつて田を逸らした。

五
人

「また聞かせてくれ」

たまはなばれ

頭を撫でる大きな手に、私はそっぽを向いたまま読みかけの本に手を伸ばした。

自然の摺理も通じません（元拍手お礼）（後書き）

雨は無いけど、雪はある。
降るかどうかはわからんが。
ついでに、嵐もありますよ。雨降らないけど。

ありえない対面（元拍手お礼）（前書き）

注・本編とは何ら関係ございません

ありえない対面（元拍手お礼）

「…」ちが加奈子さん。私の叔母で、親代わりなの。で、加奈子さんの夫で英明さん」

加奈子さんと英明さんの住まいであるマンションのリビングで、ウォルドと一緒にソファーに座りつつとりあえず紹介してみた。

「…」

真向かいで床にクッショーンをしいて座る加奈子さんは、のほほんとした挨拶が返つてくる。

一人掛けのソファーに座る英明さんは、ムスッとした顔でウンともスンとも言わない。

「…」

「こつちは一国の王様で、お腹の子の父親の…」「ウォルド・フィーチューラ・ヴィレンツィード」

体格の差違か、窮屈そうにソファーに座りながら、一国の主としての風格はあれど、私の目からすればどこか畏縮した様子でウォル

ドが名乗った。

瞬間、加奈子さんから歎声が上がった。

「かつこいい人捕まえたのね！蓮ちゃん…！」

「力ナ！それより突つ込むところがあるだろ…？」

冷静な英明さんの突つ込みもなんのその。

加奈子さんに通じるわけがなく。

「え…。あ、玉の輿！？王様なんだよね…？」

「違う…」

よくよくズレた思考を持つ加奈子さんと、どうして英明さんはこんなに続いているんだろ？と甚だ疑問に思つた。

やつぱり愛か。

愛の力なのか。

馬鹿なことは、まあ置いておいて。
仕方ないので助け舟を出してみた。

「加奈子さん、英明さんが言いたいのは、何子供作ってんだ！…って
ことですよ」

「お前が言つな！」

せつかく助け舟出してあげたというのに、何たる言い種。
作った張本人が言うなつてか？

強姦だから私に責任ねえっての。

それ以上に…

「やーだつて加奈子さん絶対わかつてないし」

「そりやそうだがな…」

「でも、そこは蓮ちゃんだし」

がつくりとうなだれる英明さんに、悪びれもなく加奈子さんが言
い放つ。

いや、てか。

「それは理由になつてねえだろ」

「私だから意味がわかりません」

幼馴染や友人らと違つて、私の貞操は緩くはない。
そのかわり、うつすいけど。

「ん？どつちも変わんないか？もしかして。

わかんなくなつて悶々としていると、それまで触らぬ神に祟りな
しどばかりに押し黙つていたヴォルドが口をはさんだ。

「流されやすいからという意味ではないのか？」

「ああ…。そうかな？」

「さつすが、ボルさん！」

私つてそんなに流されやすいか？

自分では納得いかなかつたが、叔母夫婦な二人が納得しているた
めに、違うとも言えなかつた。

自分でわからないだけで、実際他人から見ればそう見えるのかも
しない。

それにしても

「加奈子ちゃん、発音ひみょーに違ひなくボジョやなくてヴォ。

しかも最後の下が

しかも量産の力が折りにている

るなど、少し思つた。

た」で書いたのがよろしく

日本人には優しくない名前だ
ボモヴォも変わんないじやんと言いたい

「つらうど」むねニカギ。牧笛 いはうか? ボ

「わからんでもない」と改名しようがホリト...」
試しにボで呼んでみたら、思わず笑ってしまった。

「何故笑う？」

いや、急に安っぽくなつたなあつて

も無くなつた感じだ。

安っぽくしちゃ!

えは子供とは、じりじりと見だす

なんといふか、聖物な英明なるじいの発言は失笑してしまへ

てしまうのは、私だけか？

問い合わせられたら面倒だから、どうでもここに記入。

「どうも、いや、こう見。あ、結婚しないから」

あおけの大音量に ギーンと高め耳鳴りがする

「だつてだつてだつてー！蓮ちゃん白無垢はー？ウエディングドレスはー？」

「着ない（もう着せられたし）」（ホワイトデー小ネタ参照）

一度も三度もあんな仰々しいものを着せられる気は、いくら加奈子さん相手とはいえ私にはない。

一度着るだけで充分だあんなもの。

「…うう。蓮ちゃんの結婚式ー！」

本気で悔しがっている加奈子さんに、英明さんは疲れた様に肩を落としている。

「力ナ…。お前もう少し良識もつてくれ

「ヒテちゃんが堅いのよ。結婚しないってどうこうことー？」

加奈子さんは軽すぎると思います。とは言えないでの、正直に答えた。

「だつてヴォルドとは恋人でも何でもないし」

「つな…！？おまつ」

五月蠅い人が五月蠅くなる前に、畳みかけるように言葉を重ねる。「英明さんは黙つてて。ヴォルドとは話はもついてるし、一応出産の報告だけ。…ね？」

「ああ…」

ヴォルドに笑いかければ、薄らと蒼褪めた顔で相槌を打たれた。これつてもしかして、前に言つた殺される発言を気にしてるんだろうか。

英明さんが嫌いなのは私であつて、ヴォルドじゃないから気にする必要ないのに。

「そつかあ…。じゃあ、結婚する時がきたら教えてね！プロデュースするから！」

「一生しないから、しなくていいよ？」

「うん。準備しとくね。あ、ボルドさん
人の話聞いてないなあ。

加奈子さんだから当然なのだけど。

「…何か」

「蓮ちゃん泣かせたら、包丁もつて押しかけますね！」

いい笑顔で言われて、ヴォルドの顔が俄かに引き攣つた。

「そのようなことはないから、普通に訪ねてくれ」

蒼い顔のままけれど毅然として言つ、ヴォルドが可笑しくて、つい

つい加奈子さんに便乗した。

「包丁なんて持つてたら、まず門番あたりに捕まるんじゃない？ 青酸カリとかのがいいよ」

「それもそつかあ」

青酸カリがなにかは分からなくても、それが毒薬であることに気が付いたのだろう。

ほどほどにしてくれと苦く笑いながら、ヴォルドは私の頭を撫でた。

「…馬鹿娘。そいつのこと嫌いなのか？」

毒殺をススメている私に、英明さんが何ともいえない顔で言った。

「え。別に…好きな部類だけど？でも加奈子さんのが大事」

ヴォルドは加奈子さんよりは下なのは当然のこと。

何を今更とそう返せば、英明さんの表情は更に微妙なモノになつた。

「……むくわれねえなあ」

ヴォルドに対し同情する英明さんに、私は訳がわからず首を傾げた。

ありえない対面（元拍手お礼）（後書き）

何にも知らないからこそその英明の反応。
ヴォルドが一方的に懸想してるとか考えてそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0951q/>

連理の咲く庭 side storys

2011年8月25日03時26分発行